心连心
Heart to Heart

心連心：中国高校生長期招へい事業

第6期 報告書

平成23(2011)年8月30日～平成24(2012)年7月21日

心連心：中国高校生長期招へい事業

第6期 報告書

目　次

はじめに …… 1

事業紹介 …… 2

生徒名簿 …… 3

アルバム …… 4

帰国を前に ー作文集ー …… 12

メッセージ …… 44

留日情景 …… 49

留学生に聞きました！ …… 55

六期生を受け入れて …… 60

あとがき …… 64

はじめに

「心連心：中国高校生長期招へい事業」の第六期生32名は11か月の留学生活を無事終え、2012年7月に帰国いたしました。

日本各地での学校生活、課外活動、ホストファミリーとの日々の交流を通じてさまざまなことを体験し、32名の高校生たちはこの一年間で大きく成長しました。また、第六期生は同期の絆が強く、仲のよい仲間たちでした。2012年2月の中間研修では、宮崎県西都市の農家でグループに分かれ農業体験を行いました。地元の方々にお世話になり、仲間とともに自ら体を動かし野菜や土に触れてみたことは貴重な経験となったと思います。帰国前の報告会では生徒代表の発表や全員による留学生活を振り返る旅立ちの言葉が披露され、それぞれの場所で一人一人が本当に充実した一年間を送った様子を感じることができました。

本事業は今期で6年目を迎え、第一期生から第六期生までの参加者は205名に達しました。2012年秋には一期生のうち数名が中国の企業や日本の企業に就職し、いよいよ心連心プログラムの卒業生が社会人となって巣立ってきています。現在、日本の大学にも卒業生のおよそ三分の一にあたる70名近くが日本の大学に進学しております。中国の大学に進学した卒業生とともに、中国と日本、そして世界に羽ばたいていく彼らの活躍が楽しみです。六期生32名も先輩達に続き、これから大学へ進学、そして社会人となって成長していくことと思いますが、初めて日本に来たときの気持ちを忘れないで、一歩一歩自分の道を歩んでいくことを願っています。

第六期生を受け入れていただいた全国各地の高校の先生方、ご家庭で暖かく生活を支えてくださったホストファミリーの皆様、そのほかさまざまな形でお世話になりました関係各位に厚く御礼申し上げ、生徒たちの綴った感動と感謝の滞日記録ともいうべき本報告書をお届けいたします。

本事業が今後ますます発展していくことを心から希求するとともに、引き続き皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

国際交流基金　日中交流センター
所長　　阿南　惟茂

「心連心：中国高校生長期招へい事業」とは

「心連心：中国高校生長期招へい事業」は、未来志向の日中関係を築く礎として、より深い青少年交流を実現させるため、日中両政府間の合意に基づく事業としては初めての中国人高校生の長期招へい事業として、2006年度に開始されました。本事業では“心と心をつなぐ”をモットーに、「心連心」というプログラム名称を用いています。

中国政府の推薦と国際交流基金の直接選抜を受け、本事業の第六期生として2011年8月末より来日した中国高校生32名は、日本各地に滞在し、様々な活動を通じてホストファミリーや日本の高校生達との絆を深めました。

本事業は、中国の高校生に日本滞在の機会を提供し、その生活を通して日本の社会と文化を知ってもらい、同時に日本の高校生たちにも同年代の中国の高校生と交流する機会を提供するものです。直接に交流し、心と心を結び合うことで、日中両国の長期的な関係発展の基礎となる若い世代の信頼関係を築くことを目指しています。

【実施概要】

◆期　間

2011年8月30日～2012年7月21日

◆実施体制

中国国内での招へい生選考…国際交流基金と中国教育部が共同で実施
日本国内における受入れ…受入校と国際交流基金が共同で実施

◆招へい生徒

全32名（女子24名、男子8名）
平成23年度は吉林省、遼寧省、北京市、天津市、河北省、山西省、山東省、河南省、陝西省、江蘇省、湖南省、四川省より選抜

◆国内受入地

北海道、秋田県、山形県、埼玉県、東京都、神奈川県、富山県、石川県、福井県、静岡県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、和歌山県、岡山県、広島県、島根県、長崎県、鹿児島県、沖縄県

◆経費負担

学費や教科書代・副教材費、制服代など生徒が学校に支払うべき経費を上限100万円（寮の場合は150万円）の範囲内で国際交流基金が支弁

◆企業協力

特別協力：全日本空輸株式会社
協　　力：株式会社資生堂

「心連心：中国高校生長期招へい事業」第六期生名簿

No.	氏 名	氏 名	性 別	出身地	受入高校	都道府県
1	劉　子嫣	LIU Ziyan	女	吉林省	英数学館高等学校	広島県
2	張　雲銘	ZHANG Yunming	男	遼寧省	立命館慶祥中学校・高等学校	北海道
3	王　華一	WANG Huayi	男	遼寧省	秋田県立秋田北高等学校	秋田県
4	焦　健	JIAO Jian	女	遼寧省	立命館中学校・高等学校	京都府
5	徐　金鵬	XU Jinpeng	男	遼寧省	沖縄県立開邦高等学校	沖縄県
6	馬　鼎馨	MA Dingxin	女	遼寧省	東京学芸大学附属国際中等教育学校	東京都
7	安　俊霓	AN Junni	女	遼寧省	立命館宇治中学校・高等学校	京都府
8	韓　業偉	HAN Yewei	男	遼寧省	石川県立金沢辰巳丘高等学校	石川県
9	喬　倩倩	QIAO Qianqian	女	北京市	羽黒高等学校	山形県
10	聶　迎煊	NIE Yingxuan	女	天津市	大阪府立大手前高等学校	大阪府
11	魏　萱	WEI Xuan	女	天津市	広島市立舟入高等学校	広島県
12	丁　夢	DING Meng	女	河北省	京都市立西京高等学校	京都府
13	盧　雨聡	LU Yucong	女	河北省	鹿児島県立武岡台高等学校	鹿児島県
14	王　珏	WANG Jue	女	河北省	埼玉県立蕨高等学校	埼玉県
15	毛　沢龍	MAO Zelong	男	河北省	立命館宇治中学校・高等学校	京都府
16	馮　心鶴	FENG Xinhe	女	山西省	松江市立女子高等学校	島根県
17	白　佳慧	BAI Jiahui	女	山西省	和歌山県立那賀高等学校	和歌山県
18	王　凱易	WANG Kaiyi	女	山東省	大東文化大学第一高等学校	東京都
19	楊　程程	YANG Chengcheng	女	山東省	三重高等学校	三重県
20	米　淳華	MI Chunhua	女	山東省	敦賀気比高等学校	福井県
21	張　馳	ZHANG Chi	女	山東省	沖縄県立向陽高等学校	沖縄県
22	張　馨予	ZHANG Xinyu	女	河南省	光ヶ丘女子高等学校	愛知県
23	程　忻	CHENG Xin	女	陝西省	神村学園高等部	鹿児島県
24	陳　暁悦	CHEN Xiaoyue	女	江蘇省	京都両洋高等学校	京都府
25	劉　綺玥	LIU Qiyue	女	江蘇省	鳳凰高等学校	鹿児島県
26	鄒　森笛	ZOU Sendi	男	江蘇省	岡山県共生高等学校	岡山県
27	王　思維	WANG Siwei	女	湖南省	富山県立伏木高等学校	富山県
28	易　帆	YI Fan	女	湖南省	横浜市立みなと総合高等学校	神奈川県
29	李　雪媛	LI Xueyuan	女	四川省	広島県立安芸府中高等学校	広島県
30	鄧　稚雄	DENG Zhixiong	男	四川省	長崎日本大学高等学校	長崎県
31	劉　丹荔	LIU Danli	女	四川省	静岡学園高等学校	静岡県
32	丁　嘉語	DING Jiayu	男	四川省	大阪府立夕陽丘高等学校	大阪府

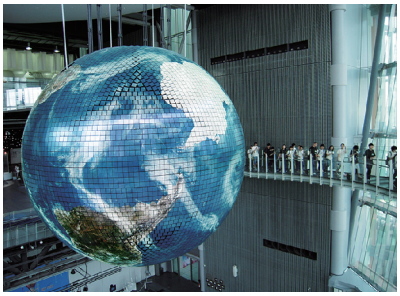
アルバム：第六期生の1年間

来日研修 in 東京・埼玉　2011年8月30日～9月3日

8月30日、「心連心：中国高校生長期招へい事業」の第六期生32名が来日しました。5日間の研修では、日本の生活習慣や日本人の考え方を学び、実際に街を歩きながら日本で生活するための基礎を教えてもらいました。そのほか、中国大使館教育処と外務省に表敬訪問し、日本科学未来館を見学しました。来日歓迎レセプションでは、多くの方の励ましをいただき、これから始まる留学生活に思いを馳せ、期待を胸に各地へと旅立っていきました。

中国大使館を訪問

日本の
科学技術は
すごい！



ドキドキ…

これから頑張りま～す！
第六期生 来日歓迎レセプション

留学生活：私たちの日常

全国各地に散って行った高校生たちは、友達や先生、ホストファミリーに支えられ、それぞれの生活を送りました。初めての日本の暮らしで、中国と違うところに戸惑いながらも、様々なことにチャレンジしました。最初は大変だったけど、努力して皆の輪の中に溶け込んでいきました。

桜満開！
初めてのお花見

青春☆

離れていても繋がっているよ！

スピーチコンテストで入賞！

文化祭♪〜

日本の兄弟が
できました！

中間研修 in 宮崎　2012年2月4日～8日

２月は宮崎にて４泊５日の中間研修を行いました。半年間のあれこれを振り返り、残りの留学生活をどんなふうに過ごしていこうか目標をたてることが目的です。また、今回は「食育 都市と農村の交流」をテーマに、西都市でファームステイをしました。初めての農業体験や農家の方々との交流を通じて、食べ物のありがたさを学び、宮崎大学の交流会ではこの研修で学んだことを発表しました。

久しぶりに再会した仲間たちは、日本語が上達しただけではなく、考え方も少し大人っぽくなっていました。悩みや喜びを共有し、同期の絆が一層深まり、互いに別れを惜しみながら、またそれぞれの生活地へ戻っていきました。

手打ち蕎麦に挑戦！

竹箸作り、真剣！

青島観光、イイ眺め～

宮崎大学の皆さんと交流

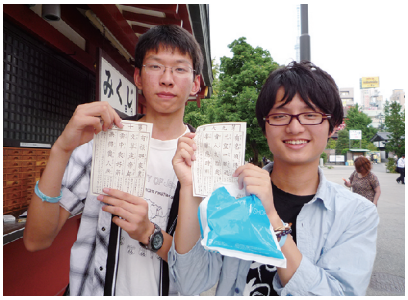
半年後、東京で会おう！

帰国前研修 in 東京　2012年7月18日～21日

日本の各地で留学生活を送ってきた第六期生32名は、ついに帰国を迎えることとなりました。

7月18日、お世話になった方々と別れ、一同は東京に集結。最後の総括となる「帰国前研修」を行いました。日本の大学進学についての講義や早稲田大学訪問、また浅草と東京スカイツリーを見学しました。

帰国前報告会では、皆で作り上げた「旅立ちの言葉」や代表生徒による発表を行い、修了証書を手にした彼らの達成感あふれる表情が印象的でした。そして、7月21日、11ヶ月間の思い出を胸に、母国・中国へと旅立っていきました。



学食で大学生気分♪

心連心の先輩も
来てくれました！

感謝を込めて
みんなで歌のプレゼント

お世話になった方々のために
乾杯！

心連心
Heart to Heart
中国高校生長期招へい事業
第六期生　帰国前報告会・歓送会
主催：国際交流基金　日中交流センター
特別協力：全日本空輸株式会社
1年間、どうもありがとうございました！

忘れない！ 私たち…

LIU Ziyan

英数学館高等学校／長春外国語学校
劉　子嫣

一年が瞬く間に過ぎました。まだ、覚えています、日本の空港で着陸した時、将来、不安がだんだんなくなって気を静めました。昔のことを思い出した時、感動と幸せがいっぱいです。もちろん、悲しいと誤解を生じる時もあります。でも、交流を通じて誤解を解いて困難を飛び越しました。

東京研修の時

不運なのは、東京に到着した日、虫に足を噛まれました。そして、腫れて痛いんです。とても、怖がっていました。先生と言った後、すぐ、私を連れて病院に行きました。途中、先生は何度も私を慰めましたが、気持ちが落ち着きました。その後、何度も病院とセンターの間で往復しましたが、先生はいつも優しくて、いたれりつくせり面倒を見てくれました。感動と感謝と言う感情はわたしの心に纏わり付きました。先生、ここでもう一度、「本当にありがとうございます」と言いたいです。

学校とクラスメート

初めて自分のクラスの人数は九人だけの時、私を驚かせました。小学校、中学校と高等学校のクラスの人数は全部六十人以上と思っています。そして、この時、すぐ文化祭があるので、クラスのみんなは毎日とても忙しいんです。何もできない私はあまっている人と思いましたが、気持ちがとても落ち込みました。でも、担任の先生が優しくて、私ができることを教えてくれました。このように、だんだん私とクラスのみんなは互いによく知っていきました。

クラスの志織は仲がよくなりました。そしてある休みの日に、志織の家族と一緒に広島の厳島神社に遊びにいきました。一日が瞬間に過ぎていきましたが、とても嬉しかったです。心で何度も、もっとゆっくり過ごすことを祈っています。

寮の生活

寮に入った時、寮生は三人だけです。私は寮に住んでいるのは初体験で、いろいろな事をしらなかったけど、美鈴と和央はいつも優しく教えてくれます。そして、美鈴の家族と一緒に水泳やボーリングなど遊びに行きました。でも残念なのは、冬休みごろ美鈴は家に帰りました。寮は、私と和央、二人残りました。寮の毎日はちょっと寂しく静かです。

よかったのは、春休み後、新しい寮生が入りました。寮は再度にぎやかになりました。性格が一番明るいみくる、絵を描くのがとても綺麗なかれん、小説が大好きなまいと仲が一番よい星星は入った後、毎日もっと幸せになりました。そして、みんなは水曜日、一緒に体育館でバスケ、バレーやバドミントンなど遊んでとても充実しています。

この一年間は、いっぱい収穫をもらいました。問題がある時、どうしたらよいか分からなかったから、自分の力で問題を解決できるまで前に大きい歩を進めました。

私の十七歳はここにいます。君たちと一緒、忘れない！私たち…また会う。

人と関わるということ　—日本留学一年所感

ZHANG Yunming
立命館慶祥中学校・高等学校／東北育才学校
張　雲銘

昨年の八月、私は中国高校生招へいプログラムに参加し、日本での留学生活を始めました。東北育才学校という国内でも有名な進学校出身で、日本語も一級とった私にとって、これからの生活は楽勝に違いなかったのです。

中国高校生長期招へい事業と名付けられ、日中交流センターが開いたこの事業、私たちの役目は多分交流だと思いました。しかし、真の交流とは何かは未だにわかりません。「交流がどういうものかわからなくても、とりあえずたくさん見てみよう。」初めて日本に来た私は、自分にいいました。

向かった先は北海道の立命館慶祥高校、これからの一年の生活を楽しみにして、寮につきました。去年もちょうどこのプログラムの人が同じクラスに入ったので、中国に興味を持って、話しかけてくれたのは、ただ一人しかいませんでした。試験を受けて、みんなに自分の学力を見せようとしたら、「去年の留学生も同じ感じだったよ」としか言われなくて、とても悩んでいました。すると私はテニス部に入ると決意したのです。運動部は普通話しやすいタイプで、カラオケに行ったり、お好み焼きを食べたり、いろいろ絡んでくれました。私も部内の海外研修が中国である人にいろいろアドバイスをあげて、仲良くできました。やはり人は普通知らないことに好奇心を持っていて、チャンスをみずから作り出し、物事を伝えることはできるのである。自分の得意分野においては特にそうです。しかし、ただ勉強の教え合いで仲良くできた人はほぼいません、なぜ日本の高校生は勉強を私たち中国人のように重視していないのでしょうか。

そして自分も研修旅行で広島を訪れたのです。事前学習でもいろいろ学んできましたが、被爆者たちの遺品や写真をみて、どんな教科書よりも驚きました。その中でも、「貴国の核爆弾実験に対して厳重に抗議する」という広島市長からの抗議文が私の心に刻まれたのです。国は人の集合体として、一人の存在をかなり超えたものだといってもいいでしょうか。この原爆問題はまさにそうであると思います。中国にとって自分を守るための必要な武器は、日本にとって惨い記憶と結びつく恐ろしい存在なのではないでしょうか。このような溝を埋めたり、誤解が解けたりするのはまさに交流だと思いました。

帰ってきたら、今までの留学生のように、弁論研究部に入りました。研修旅行の話を生かして、弁論を作ることになったのです。最初は自分の意見をはっきり言うこともできないし、主旨を出すのもできませんでした。先輩からもプレッシャーがかかってきて、そのときに一緒に出場することになる一人の男子も悩んでいました。気持ちは共通していたため、一緒に原稿を書いて、通学のバスもずっといろいろ話していました。男という生物は競い合ううちに絆ができるのだから、ライバルでありながら親友になったのです。部長も私のマネージャーとして、表現などの練習をつきあって、大会で優勝の結果を残すことができたのです。

部活は中国でめったにないもので、そこにはクラスメイト同士よりも深い人間関係が築かされています。部活を通して、生徒に専門知識よりは人とのつきあい方、大きく言えば、社会の秩序を教えていると言えるでしょう。時に北大に受かった先輩が学校に来て経験を教えたら、七月まで部活を続いたそうです。大抵部活という場で人と関わることを楽しんでいるから、支え合ううちに成長したでしょう。

親友がいる部活は言うまでもなく、出ることが楽しくなり、弁論のスキルもうまくなることができる。部内戦でも優勝をおさめました。向こうの人が当然できているところで勝つことができれば尊敬されるのではないか。ずっとそう思っていた私は、勉強において、今までの先輩が高い点数をとった理科はもちろん、国語などの文科にも力を入れました。評論や歴史を楽しむのはともかく、自分が受けた教育を振り返ることもやってみたのです。担任の先生は「ただひたすらがり勉するなら、予備校に通えばいい」と言いました。

確かに私は勉強という技術は整えているものを、学んだことを学問としてはいなかった。日本の教育は学生を勉強以外のこともたくさん体験させて、量を減らす一方、勉強を学問と扱おうとするのを強く感じたのです。選択肢が増えることによって、学生は自分にふさわしい人間、つまり夢に近づいていきます。

そして、受験クラスに入ったので、日本の入試については、どんな人間でも才能さえあれば、適する大学に入れるということを知り、明治以来日本は教育への専念をさらにわかる一方、中国の教育にもそろそろ改革が必要になるのではないでしょう。次の世代は、こういう教育を通じて、頭いいより健全で社会に役立つ人になればいいと思います。

春休みの間、弁論部の親友の家に泊まることになって、短い時間の中で毎日夜遅くまで話すのは本当にかけがえのない経験で、交流というものも少しずつわかってくる気がします。時の流れにしたがって、今のものはすべて過去になり、今の人との絆は忘れ去られるにもかかわらず、人にとって最も貴重なものだとも言えます。人と関わることによって、記憶や経験を共有するにとどまらず、他人を自分の一部として受け入れ、そして自分が他人に受け入れられるようにして、人と関わり、つながる中に、優しさというものも生まれるのではないか。人はみんな、一人きりじゃ、生きてゆけないからとBeyondというバンドが歌ったのです。私の世界に、こうして関わってきた人がいるからこそ、鮮やかになりました。これは人生最高の贈り物だと信じています。ありがとうという気持ちは、この絆とともに、私の中にいつまでも続いていきます。

中国では、温家宝首相の日本訪問を「氷を融かす旅」といいます。それは、誤解を解くという意味です。私たちは一方的に氷を融かすより、関わり、わかり合い、そして相手を自分に不可欠な一部とする。中日の架け橋として努力していく私たちは、人と関わることを伝えていくのではないでしょうか。

三日目の蜉蝣

WANG Huayi

秋田県立秋田北高等学校／東北育才学校
王　華一

セミと一緒に、夏場の象徴として知られる蜉蝣は幼年期にずっと水の中に生息し、成長するにつれて、川岸、森、世の中の景色を見ようと思い込んで、川から飛び出す虫と言うのです。ものすごい励みのある話のはずなのに、なんと世界が目に入る瞬間から、この蜉蝣に僅か三日間の寿命しか残っていないそうです。では、蜉蝣の一生、この三日間に何をやって行くだろう。さぞかし目で見たものを頭脳に詰め込み、身に感じたものを心に刻み込むといったところでしょう。あ、それに、新しい命を産むことです。同じ短命な生物ですが、セミのように往生際を迎えて謳歌とか一切せず、黙って幼虫を産んで、最後は自分の絶賛の記憶と一緒に去っていくというのはまさに蜉蝣の一生の縮図なのでしょう。

十ヶ月前に、日本の秋田県に留学ということで来た私は極めて複雑な気持ちを持ちつつ、自分の蜉蝣のような生活を始めました。そして、瞬く間に『いざ、さらば』というときがめぐってきました。振り返ると、スライドショーのように、この一年の生活が頭の中を掠すめます…

「なんか田舎っぽくない？まあ別にいいじゃん、景色がいいし…」というのは秋田に対する第一印象です。それから、思ったよりずっと短い時間でホームスティの家族のなかに溶け込むのは確実に私の意表をつきました。顔つきが似ているかどうか、よく近所の人たちに大友んちの実の子供だと誤解されてしまいました。(自分もなんだかこの一年間顔が変わったような気がするけれど)お父さん、お母さんといろいろなところへの見学、家族全員のいろいろな行事は未だに目に焼きついています。日本で、こんな家族が出来て，もう一軒の家があって、本当によかったです。くじ引きでいうと超大吉じゃないかと思っています。

この文を書く頃は図書室にいます。もうそろそろ閉館の.時間なので、学校から出てきました。秋田北高校の校舎は夕焼けを浴び、妖艶な美しささえ感じさせました。「ここにも、多くのかけがえのない記憶が出来たのだなあ」と思いつつ駅に足を走らせました。

漢文の授業で詩を読まされたり、世界史の授業で満州の地図を書かされ足り(恥ずかしいながら、間違いました)先生たちは私のことを常に見てくれて、感謝の気持ちはいっぱいいっぱいです。

話かれられやすいタイプもおかげで(そもそも自身もおしゃべりですし)友達もすぐできました。バスケットボール部の練習が終わったら駅前のうどん屋さんでがっつりと食べたり、テスト終了後市内のカラオケ、バイキング、バッティングセンターを遊びまくったり、最高な記憶です。

蜉蝣のように成長して、外界のものを摂取すると同時に回りの環境に溶け込んでいくというのはこの一年間のあらすじかなあ。蜉蝣は終焉で新しい命を産むことを通じ、実は、斬新のスタートを作り出したといえるでしょう。

秋田から、日本から離れるのは決しておしまいではなく、逆に、成長した自分が新しい起点で立ち直すことです。これから、この一年間で学んできたことを生かすタイムです。

お父さん、お母さん、北高の先生たち、心連心の先生たちに心より感謝を申し上げます。『さようなら…』が寂しいから、『また会いましょう!』と言わせてください。

私♥日本

JIAO Jian

立命館中学校・高等学校／東北育才学校
焦　健

日本に来てから、もう11ヶ月が経った。この約一年間を振り返ったらたら、辛かった時も楽しかった時もあった。でも、ここで私が一番言いたいのはこの一年間で、自分が本当に成長したことだ。

それの前に、私はいくつかのことを通して、自分が出会った日本人を紹介したいと思う。

一番印象深かったのは多分日本人の優しさだろう。初めて自分で学校に行った時、道に迷ってしまったので、近くで花を世話をしていたおじいさんに道を聞いた。私は日本語があまりにも下手で、自分でもこれ以上聞いたら本当に申し訳ないと思った。しかし、向こうは何度も親切に説明してくれた。しかも、最後に「連れて行こうか」までも言われたので、とても感動した。初対面なのに、相手のことを十分考えたうえで、助けてあげられることが多分外国人が日本人を好む一つの理由だろう。私も学校で友達と先生にいろいろ助けてもらった。「健ちゃん、自分でいける？」「代わろうか」といつも聞いてくれた。日本人の優しさは生活の些細なことから身にしみてくる。

なぜ私は成長したかというと、今の私は何かをするときは絶対にまず「こうしたら、みんなに迷惑かけるかな？」と考えるからだ。今考えると、一人っ子の私は中国にいた時どれだけわがままだったのかがわかった。両親の優しさを当たり前として、自分は自分の好きなことをすればいい、両親はそばにいるから、自分は何も考えなくてもいいという考え方は根本から間違っていたということ日本に来てから初めてわかった。そして、周りの人に感謝の気持ちを持つべきだと思う。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために…」それはドイツの留学生が校外学習の時いつも歌った曲の一部分だ。確かにその歌のおり、日本人はそうして、支え合って、団結したのだと思う。

日本が好きだけど、帰国しなければならない。毎回そう考えたら悲しくなる。残りの期間は一ヶ月しかない。しかしみんなに「健ちゃんが帰ったら、私は寂しい」と言われた時は本当に嬉しかった。こんな私でもそう言ってもらえるんだ思った。今考えたら、不思議なのは私が日本にいる間に、ホームシックにあまりならなかった。それは中国の家族が嫌いなわけではなくて、実は日本が楽しくて、ホームシックをする暇が全然なかったからだろう。

よく考えたら、まだ一ヶ月もある。その一ヶ月を悔いのないように過ごしたいと思う。周りの人に感謝したいんだ！恩返ししたいんだ！

いつもお世話になったホストファミリーのみなさん、先生、友達、本当にありがとう。みんなのおかげで、私はここまでこれた。一年後、また日本に来るので、その時は「ただいま」でみんなに挨拶したいと思う。

生活三部

XU Jinpeng

沖縄県立開邦高等学校／東北育才外国語学校
徐　金鵬

この一年間の留学生活はもうすぐ終わりますが、今、この文章をどうやって始めたらいいか分かりません。

第一章　不安

2011年8月28日、私は緊張の気持ちで家を出ました。

2011年9月3日、私は緊張と興奮の気持ちで沖縄に到着し、この一年間の留学生活を始めました。

「日本人はどんな人かな？」、「日本の学校は厳しいかな？」、「これからの一年間はどんな生活になるだろう？」と、いろいろな思いが浮かびました。その時、北京で面接した時の緊張感も、まだはっきり覚えていました。そして私は今、こうして、日本で生活をしています。本当に、時間の速さにびっくりしました。

夜の8時頃、先生と一緒に学校の寮に到着しました。大きなスーツケースはまだ届いていなかったため、荷物はかばん二つだけでした。あの時、玄関に入る前の気持ちを今でもはっきり覚えています。入った後、みんなから親切な挨拶をもらいました。優しい笑顔もありました。男子の先輩方は、自分の代わりに荷物を部屋まで持って行ってくれました。簡単な挨拶と自己紹介をした後、部屋に行きました。荷物は少なかったので、整理するのは簡単でした。あの夜、一年生、二年生、そして三年生と、みんなだんだん私の部屋に集まってきました。部屋はとてもにぎやかでした。日本語はあまり分かりませんでしたが、11時半まで話していました。あの日、私は寝るまで心がどきどきしていました。

9月5日、学校の初日、見知らぬ教室、見知らぬ顔、これからここで勉強をするのだと思ったら、緊張感が湧いてきました。その日は第2回実力テストの日でした。挨拶と自己紹介をしたあと、すぐ試験に入りました。日本語で試験を受けるのは初めてのことで、とても不安でした。その後の授業では、先生の話はあまり分かりませんでした。クラスメートの会話も理解できませんでしたから、とても固まりました。「生活はこのままで続くだろうか？」と、ずっと心配していました。

第二章　楽しみ

最初の頃の不安は本当に忘れ難いですが、生活と友人たちとの楽しみはもっと忘れ難いものです。

私は最初の一週間で大勢の友達ができました。友人たちのおかげで、あの不安の気持ちは長くは続きませんでした。授業が終わったら、クラスメートたちが授業の内容を説明してくれました。話す時は、いつも分からない言葉がありましたが、みんなは簡単な言葉に言い換えて分かるまで説明してくれました。生活は質問と答えを通して楽しいものになりました。

部活動は、日本の学校の特色の一つです。私は最初、男子バレーボール部に入りました。人数は少なかったですが、みんなと一緒に一生懸命に練習する時は、とても楽しかったです。バレーボールは協力が必要なスポーツですから、みんなと一緒に努力するのはとても楽しかったです。

これまで、友達と一緒に数多くの学校行事に参加してきました。校内陸上競技大会、送別球技大会、クラス会、新入生歓迎球技大会、寮生バレーボール大会、遠足、そして、開邦祭。。。　一緒に準備して、お互いに協力して、全員の力で成し遂げる。本当に素晴らしい行事でした。

週末の時も、時々、忙しかったです。部活動以外に、私は「長城会」という活動に参加していました。そこでは、中国語を勉強している日本人と交流します。相手は中国語を練習し、私も日本語を教わりました。参加者は学生ではありませんでしたから、その活動に参加することで、学校以外の日本について学ぶことができ、とても楽しかったです。

一年間の生活は一言でまとめると、「楽しみ」でした。

第三章　絆

人間にとって、最も重要なものは、この「絆」だと思います。この一年間で、一番忘れ難いものは、数々の「絆」です。

友達との絆、先生との絆、開邦高校との絆、また、日本との絆。

一緒に勉強して、一緒に生活して、一緒に努力して、寮生もクラスメートも、部活動のみんなも、自分たちの暗黙の了解があり、自分たちの楽しみがあり、自分たちの心と心の「絆」があります。

先生も、授業の中では先生ですが、放課後は友達です。こんなに優しい先生たちと一緒に遊んで、一緒に問題の答えを探して、私は先生から日本のことを学び、先生は、私から中国のことを知る。この師弟の絆は、一生忘れないです。

一年間、開邦高校で勉強し、開邦高校で生活し、開邦高校で「知徳体の成長を目指し、自他を信頼し、クラスに貢献することを心掛け、何事にもベストを尽くす」精神を大切にしてきました。私は、開邦高校で邦を開くために準備しています。開邦高校との絆は、これからもずっとずっと私の心の中で生き続けます。

日本、それは私の夢がある場所。私の人生を変える場所。一年間で日本に対する感情はより深くなりました。友好の懸け橋になりたい私は、将来、必ず、この特別な絆を持って、再び日本に戻り、夢の実現のために努力します。

一年間の生活はもうすぐ終わります。この一年間で様々な経験をしました。悲しかったこと、嬉しかったこと、いろいろありました。一年間、心と心で交流しました。この一年間でとても成長できたと思います。一年間はとても長いですが、同時に、とても短いと思います。これから、また新たな生活が始まります。「絆」を持って、磨斧作針の精神で、これまで以上に頑張ります。

この文章はここで終わります。けれども、一年間の感想は、これだけではありません。将来、もう一度日本の土を踏んで、この経験、この絆を続けていきます！

日本、行ってきます！

日本との絆

MA Dingxin 東京学芸大学附属国際中等教育学校／東北育才外国語学校
馬　鼎馨

9月、中国の友達や家族とわかれ、日本海の向こうのよく知らなかった国に出発した。飛行機で眠らずにそのままずっと起きていたのは、自分の故郷からどんどん離れていく感じを記憶に刻ませたかったのだ――楽しみだけど寂しい、自信を出したいけど無力と感じる。そんな気持ちが全部複雑に混ざりあっていた。この不安の元は、ギャンブルみたいに、自分の未来や人生をかけて、「この一年間充実させることができれば勝ち、無駄にしたら終わり」っていう気持ちをこめているからだ。数時間ののち、日本の領空に近づいて、心の中で決めた「泣いても何も変わらないので、積極的な態度で、自立な日本の生活をしよう」。強くなりたい、強くなれない、でも強くなってみせる！

最初の研修、私と同じような不安をもったひとたちが集まっていた。だから、あまり寂しさを感じず、お互いに励まし合い、わらったりして、楽しい五日間を過ごした。基本的なマナーや地震などの災難に対しての対応のし方などたくさんのことをまなんだ。研修が終わって、泣きながら別れ、みんなそれぞれの生活を始めることとなった。

初めて日本の高校に入った。自己紹介の前は緊張したけれど、クラスメイトたちの優しい笑顔をみて、安心した。そして、初めての授業――国語。まじめに聞いて全部楽に理解できる日本高校生のなかで、授業内容まったくわからず宇宙人みたいな私がいた。強い違和感を感じた。その時、不安になった私に、親切に先生が言ったことを教えてくれたのは、まわりのクラスメイトだった。一回説明してもわからないときは、みんなできるだけ簡単に、何度も何度も繰り返して説明してくれた。これをきっかけに、自分は1人じゃないとわかり、とても感動した。休み時間に、まわりにみんな集まって、私を笑わせてくれたりした。瞳をみればわかる、それはただの珍しがっているだけじゃなく、本当に心から私を歓迎して、仲良くなりたいのだと思った。みんなのおかげで、私はすぐに日本の生活に慣れることができた。

二学期が始まり、私ずっと憧れていた文化祭がまもなく行われた。グループにわかれて、手作りのベッドや冷蔵庫を作った。みんな器用だなあと思った。こんなふうに、一週間頑張って人気投票の結果は二位だった。これは人生初の文化祭だったが、完璧だった。

いろんな友達ができて、ホストファミリーのみんなも仲良くしてくれた。初めて友達と出掛けてプリクラをとったり、初めてハロウィーンパーティーをしたり、初めてホストファミリーのみんなと東京タワーにいったり、初めてテニス部に入って、先輩からテニスを教えてもらったりした。いろいろ体験して2ヶ月間はあっという間にすぎ、期末テストになった。テスト勉強は大変たったけど、負けたくない、日本語で日本人に負けるのは当たり前なことじゃない。こう思って頑張り、いいとは言えないけれど、ちゃんと自分で満足できる成績をとることができた。やっぱり努力すれば何でもできるようになると思った。

そして遂に冬になった。電車から見えたのは、いつもと違う雪の景色。雪のなかの東京は静かで、神聖で、故郷の瀋陽みたいな、安心感をかんじた。この時期、中国はきっとお正月だなとおもった。なんだか少し寂しくなった。でもホストファミリーの人たちはみんな優しくて家の雰囲気は暖かかった。「やっぱ日本に来て良かった」と思った。忘れられないのは学年でスキー場にいったこと、忘れられないのはクラス全員が私の誕生日パーティーをしてくれたこと。今でも幸せな瞬間をたくさん思いだし、心が暖かくなってくる。

4月、ひらり、ふわり、舞い落ちる桜。気付いたらもう6ヶ月がたっていた。この6ヶ月の間に、ラケットにボールが全然当たらなかったテニスもナイスショットが打てるようになって、あまり話せなかった日本語も普通にしゃべるようになって、書けなかったレポートも前より上手に書けるようになって、よく迷子になっていた1人の町歩きもできるようになって、1人でご飯を作って、1人で重要な選択をして、自分のことを自分でやって、たくさんたくさんな体験をして、本当に成長しました。先生たちも、ホストファミリーの家族たちも、友達も、困ったとき迷わず助けてくれて、二度とも会えなく、名前も知らない人たちも、みんなは私の天使みたいに、いろいろ教えてくれて、愛と力で応援してくれて、感謝も求めず、そのまま私の人生から消えて、暖かい感動を残してくれた。ご迷惑をかけてすみません、お世話になって、本当にありがとうございました！

すべてを手に入れてからすべてを失って、誰かと出会ってから誰かとわかれて、このように永遠は存在しない。充実感満々なこの一年間は知らず知らずに過ごして、もうすぐ帰国前の研修となります。最後の1ヶ月間も、自分の未来のため、愛する人たちにがっかりさせないためにも前に進みたいと思います。

「若者が強ければ、国も強くなる」と言うように、これからも必ず自分の責任を忘れず、国の未来の力になり、日中友好のために頑張ると誓います！

一年間の留学生活

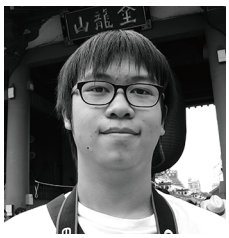
AN Junni
立命館宇治中学校・高等学校／東北育才外国語学校
安　俊霓

2011年9月に日本に来て、もう一年が経ちました。この一年間を利用して日本の学生たちと一緒に勉強したり、日本のホストファミリーと過ごしたり、日本の文化を体験したりして、とても価値のある、充実した一年間でした。一年間を通じて、たくさんの「初めて」を体験しました。そして、一年間の日本での生活からいろいろ学びました。

この一年間に一番成長したと思う経験は2月の英語暗唱コンテストです。私は人前で話すのが結構苦手でした。特に感情をこめて何かを読んだり、暗唱したりすることはとても怖く思っていました。昔は発表するとき、声さえ出なかったことも何回もありました。だから、今回のコンテストもとても怖く思っていました。クラスでミニコンテストをした時、内容はちゃんと覚えたはずなのに、みんなの前に立ったら、頭が真っ白になりました。ぎりぎりトップ3に入りましたが、そのままだと、コンテストは絶対だめだと気づきました。昨年までのコンテストの優勝は全部中国の留学生が取りました。今年は、中国人の代表として、私が優勝しないとだめだと強く思いました。だから、コンテストまで感情をこめて、暗唱できるように頑張ろうと決めました。いよいよ本番の日が来ました。舞台の裏側で準備したときとても緊張して、また声が出なくなりました。けれど、今回は優勝しないといけないと何回も自分に言い聞かせていました。水を飲んで、深呼吸をして、だんだん声が出てきました。私は一番のスピーカーでした。司会者が私の名前を呼んだ瞬間、「よし、中国のために、挑戦しよう!」と自分に言い聞かせました。舞台に上がって、礼をして、マイクの前に立って、拳を握って、暗唱し始めました。驚いたことに、結構すらすら言えました。最後の部分を暗唱するとき、自分が緊張しすぎて、何を言っているかは全然わかりませんでした。そのまま私は暗唱を終えました。結果は2位でした。悔しくてしょうがなかったのですが、勇気を出して、自分の壁を突破できたので、成功だったと思います。この経験は一生忘れられません。

また、この一年間を通じて、大切なことに気づきました。それは、何事も一度決めたら最後まで続けることの大切さです。私は音楽が好きだったので、思い切って吹奏楽部に入りました。けれど、フルートは初めてだったので、最初のとき、音も出ないし、肺活量も足りないし、12月に一回やめようと思って、先生に「やめます」と言いました。先生はせっかくここまでやってきたのに、やめたらもったいないので、もう少し考えてみなさいと言いました。家に帰って、もう一度よく考えました。やはりせっかく曲吹けるようになったので、やめたらもったいないと思いました。そして、ここでやめることを選んだら、これからも絶対何か難しいことがあったら、あきらめることを選ぶだろうと思いました。それでは、人生は大失敗だと気づいたので、先生に最後まで続けて頑張りますと答えました。今はまだ先輩たちに追いついていませんが、最初の自分と比べたら、かなり上達していると思います。今考えたら、あきらめずに、頑張って続いてよかったです。

一年間は短かったですが、いろんなことを学べました。この一年間で、知識だけではなくて、何かを決める前によく考えることや、成功する人になることに必要な能力などもたくさん学びました。それは、学校では勉強できないものです。この一年間は私の一生の思い出と宝物になります。



日本の十一ヶ月の記憶

HAN Yewei
石川県立金沢辰巳丘高等学校／大連市第一中学
韓　業偉

どんどん日本にいる時間はもうすぐ十一ヶ月になって、この十一ヶ月の時間でいろいろな事があって、一生にも忘れないイメージがありました。いいイメージもありますし、あまりよくないイメージもあります。両方ともありますけれども、これらの経験はやっぱり助かってくれました。

ポイント①　交流

十一ヶ月の時間の中にいろいろな活動を参加しました。例えば中国文化会とか日本文化体験とか、これらの活動通して交流の目的を達成しました。でも、「交流」という事は文化だけでなく、いろいろな方面があります。

このプログラムのおかげで、いろいろな今まで見たことのないことを体験できてよかったと思います。

ポイント②　慣れる

九月に日本に来てホームステイを始まりました。日本のホストファミリと一緒に生活するのは初めてですが、すごく緊張しました。やはり家によって違うルールがあります。

ポイントの「慣れる」というのはルールだけでなく、例えば日本の食べ物とか、日本の気候とか、いろいろあります。わたしは初めて家族から離れて一人で日本に来て、「homesick」がすごかったです。孤独を慣れるのもすごく大事なことだと思います。この一年ぐらいの時間でもう大体日本のすべてを慣れました。

これからの留学とか新しい環境に変わっても、早く慣れることができてよかったなあと思います。

日本にいる間はホームステイをしたこともあるし、ホテルとアパートに住んだこともあります。まずホームステイを頂いた吉崎家と東家の皆さん、いろいろお世話になって、どうもありがとうございました。そして、担当の菅原先生と学校の先生たちもいろいろ助かってくれて、アパートの時も毎日見に来て、どうもありがとうございました。最後に交流センターの先生たち、私のためにいろいろ考えていただいて、どうもありがとうございました。

もし将来チャンスがあったらきっと留学に来て、日中友好の架け橋になるためにもっと交流をしたいと思います。

私たち

QIAO Qianqian

羽黒高等学校／北京市月壇中学
喬　倩倩

まず、四ヶ月お世話になったホストファミリと担任の先生や各教科の先生に感謝の言葉を言いたいのです。本当にありがとうございました。そそっかしいＱちゃんはとてもお世話になりました。もともと笑いながらこういう話を言いたかったです、でも、こんな時は本当にどうしても笑い出せません。これからもう別れますよ、またいつか会えるか全く分かりません、やりたいことはまだいっぱいありますが、時間は待ちません。

新学期が始まり、新しいクラスに入りました。最初は本当にすごく緊張しました。あの朝、職員室で先生を待つとき、何回も深呼吸しましたが、落ちつけられませんでした、誰もいない職員室はとても静かでした。今回は絶対自分から皆に話をかけると決心しましたから、緊張しちゃいけません！そう思いながら、もう一回深呼吸をしました。今朝家を出る前に鏡の前で何回も練習した笑顔を出しました、ちょっと馬鹿らしいですが、真面目にやりました。

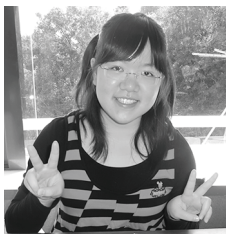
でも、新しいクラスメイトと会ったとき、不安と緊張は少しずつ消えました、みんなと同じ出発点だからかもしれません、みんなは私に自己紹介をしました。そんなに冷たい空気ではなかったです。みんなは話しやすい人です。高校に入ったばかりでまだまだ新しい環境だからかもしれません。いろいろなことで話しました。クラスの雰囲気がとても楽しかったです。最初の日は笑いながら過ごしました。

あれから時は経ち、楽しい日々が続いています。友達と一緒の日、さまざまなことを学びました。面白いことがいっぱいで、学校生活は本当に最高です。羽黒山参拝やコンサートなど、昼休みの時も友達と一緒にご飯を食べたり、話したりして、後また授業を受けて、気付いたらもう夕暮れになりました。学校だけじゃなく、ホストファミリーのみなさんもいろいろ教えてくれました。四ヶ月間でお世話になっていて、私のことを本当の家族だと思ってくれました。さくらんぼを取りに行ったり、ボートを乗りに行ったりして、自然風景をいっぱい見ました。最初の頃、私は自転車を乗れませんでした、お父さんと妹二人と一緒に練習に行っていました。学校から帰ると、いつもお母さんの料理を食べます。お母さんは栄養師で、いろいろな健康的な料理を作ってくれます。

日本にいる間、たくさんのことを知りました。前の自分は本当に弱気な人でした、見知らぬ人の前で話すことが苦手で、初対面や新しい環境の中で、緊張していました。相手とどんな話をすればいいのか分かりません。一生懸命話題を頭の中で探していて、ようやく見つけて話しかけたとき、二言三言で終わってしまいます。しかも時々話が通じなくて、クラスメイトたちは私が言いたいことが分かりません。寮にいた時も外で遊べなくて、その時、本当に寂しかったです。つまらなかったです。日本語を勉強していた場所で出会ったホストファミリーの広美さんが母親みたいで、たくさんの事を教えてくれました。その時から、私は反省しました。自分はまだどこか足りないし、欠点を改めていきたいと思いました。この後、最後のホストファミリーと会いました。お父さんとお母さんとお兄さんとお姉さん、あとお姉さんの旦那さんとかわいい子供が二人で、本当に幸せな家庭です。お母さんはいつも私に大事なアドバイスをくれて、悩みもちゃんと聞いてくれます。自分のことは厳しいって言っています。でも、私は好きなお母さんです。お父さんはいろいろなところに連れてくれて、元気な人です。子供の二人と遊んでいるとき幼小時代に戻ったみたいで、よく遊びました。高校生はあまり体を動かして外で遊びませんから。お兄さんとお姉さんは仕事を一生懸命しています、生き生きしています。

いつもそばにいてくれる友達のみなさん、よく私のことを面倒見てくれて、怪我したときは心配してくれて、感動しました。毎日私を笑わせてくれてありがとう！離れたくないけど、この楽しい記憶はきっと心に残るから、またいつか会おうね。

最後、周りの人にも感謝しています。帰りが遅くなったとき、お菓子をくれた人、困った時助けてくれた人、ありがとうございます。この素敵な思い出を心に焼き付けて、国に帰ります。



麗しい大阪城、愛する大阪

NIE Yingxuan 大阪府立大手前高等学校／天津外国語学院附属外国語学校
聶　迎煊

紅葉、梅、桜、青葉。

大阪城の四季はどれもが愛しい。賛美せずにはいられないほどに。

燃えるような紅葉に包まれた城、その心を揺り動かす景色が未だに目の前に浮かぶほど記憶に新しいのです。しかし、瞳を凝らすと、既に桜が散ってしまい、若葉が萌え出る季節が来たと悟ります。なるほど、光陰矢のごとし。日本に来てから、もう十ヶ月の時間が過ぎてしまいました。

去年九月に、北京から東京行きの飛行機の中で、もうすぐ着陸するこの土地、もうすぐ始まるこの一年間の生活に対して、緊張しながらも期待に満ちた気持ちは未だに忘れられません。成田空港を出て、前に歩き出す私は、青く澄み渡った空に向けて両手を伸ばし、深く息を吸い込んで、「留学生活、スタート！」と思わず、大声で叫んでいました。

東京での研修を終え、私は早速新幹線に乗って、頭の中で何回も想像していた留学先ー大阪に到着しました。「天下の台所」と呼ばれて世界中で名高い大阪について、私はそれほど詳しくありませんでした。ただ「食い倒れ」と言われるほどに、食物に貪欲な大阪の人は、きっと朗らかで親切だろうと思いました。そして、この一年間の体験を通じて、大阪は確かに活力に溢れている都市だと実感しました。

大阪に着いた次の日に、私は初めて大手前高校に来ました。駅から学校に行く途中で、大阪城が目の前に現れました。まさか、大手前高校が大阪城の前にあるとは。驚きながらも、うれしい気持ちを抑えられませんでした。その日はちょうど学園祭で、学校の中は賑わい、楽しげな声や笑い声に包まれていました。私が入ったクラスは、喫茶店をやりました。お客さんがたくさん入ってきて、初めて学園祭に参加する私は、本当の喫茶店と変わらないぐらいだと、とても新鮮に感じられました。私はお客さんを案内する仕事をして、初めての日でもあったので、ちょっと疲れを感じましたが、みんなが「おいしかったです」「ご馳走様でした」「お疲れ様です」と言ってくれて、うれしく思いました。また、些細なところで見せる日本人の礼儀正しさにはとても感動しました。楽しい時間はすぐ過ぎってしまいます。閉会式で、私は全校生徒の前に立ち自己紹介をしました。嵐のような拍手の中で、私が参加した初めての、そして一生に一度限りの学園祭は終わりを告げました。私の人生で忘れられないお宝のような思い出です。

日本文化の体験として、武道に興味のある私は、剣道部に入りました。剣道と言えば、たくさんの日本人に「礼で始まり、礼で終わる」運動として尊敬されています。技はもちろん、含まれている武士道の精神も重んじられています。初心者の私は基本の摺り足と素振りから練習し、裸足には慣れていませんでしたから、怪我をするのは毎日のことでした。でも、いくら痛くて辛くても、私は歯を食いしばって頑張りました。努力は絶対裏切らないのです。私の進歩はみんなに認められて、基礎の練習を終えました。胴着と袴を着て、防具をつけ、道場の中でみんなと一緒に稽古する日が来た時のうれしさは今でも忘れられません。段々と剣道を好きになり、仲間と一緒に頑張るのを好きになり、クラブは私の生活の一部分になったのです。

大手前高校は、勉強、クラブだけでなく、充実した多彩な行事も繰り広げられています。学園祭、修学旅行、コーラス大会、マラソン大会、球技大会、体育大会…忙しい毎日の中、クラスメートやクラブの友達とはますます仲良くなってゆき、まさに交流によって、中国と日本両国は深い友情の絆で結ばれていることを実感しました。いろいろなところに観光や見学に行って、数箇所のホストファミリーと生活することによって、日本の家庭や社会についても深くわかるようになり、学校では勉強できないこともたくさん身に着いて、すばらしい経験になりました。

十ヶ月前に東京での来日歓迎会において、抱負発表で誓った言葉はまだ耳の辺りで響いています。この一年間の生活もありありと目に浮かびます。毎日通学する時に眺める大阪城は、太陽の光を浴びて、いつも変わらず麗しく輝いています。その変わらない大阪城の前に立っているのは毎日変わっていく私。いつまでも忘れられません、大阪城の古い城壁、高く聳える天守閣、澄み切っているお堀。私の愛する、大阪城。

「揺ぎ無き　力の象徴（しるし）　大手の前に　学ぶわれら
あめつちの　心雄々しく　いざたたん　つよき信念（まこと）に
信念（まこと）に」

百年以上の歴史ある学校は、校歌まで力強いのです。大阪城の大手門の前にある大手前高校、この学校で勉強したことは、誇りでもあります。大阪城を眺める日々の中、私は17歳になりました。親の元を離れて異国に来た一年。泣いたことあり、疲れたことあり、努力したことある一年。成長して、自分の頭で考えるようになった一年。私は大阪城に向かって、微笑んでこう言えます。「一年間、ありがとう。私の愛する、大阪。」

旅立ちのとき

WEI Xuan 広島市立舟入高等学校／天津外国語学院附属外国語学校
魏　萱

2011年8月31日、2012年7月21日。この二つの日付は私の長くて短い留学生活を振り返るうえで、忘れられない日になるだろう。どちらでも旅立ちの日だ。約一年間、私が日本で、広島で、体験したことは一生の宝物になるだろう。

第六期生、32名の留学先が日本各地にわたったが、私は広島県に行くことになった。学校は広島市立舟入高等学校。舟入高校の前身は広島市高等女学校で、1945年に投下された原爆により、大きな被害を受けた。だから、学校においても広島市においても平和教育を受ける機会を多く得た。平和な年代に生まれてきた私にとっては、重たいけどすごくいい勉強になった。平和記念資料館に行ったとき、原爆に関する情報が一気に頭に入り込んで、その恐ろしさで一時落ち込んだ。同時に、原爆の威力や人々に与えた被害などを学ぶことによって、始めて原爆や戦争について真剣に考えるようになってきた。一般市民は何もしなかったが、こんなにひどい目にあった。しかし当時、みんなが思っていたのは復讐ではなく、どうやって故郷を再建するか、どうやってこんな悲劇を繰り返さないかということであり、その考えや行動を敬服せざるを得ない。

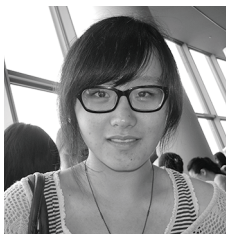
この一年間は本当に楽しかった。中国と全然違う教育制度によって、向こうにいた時より自由な時間をいっぱい得ることができた。自分の趣味や興味を持っていることを楽しむことができたと思う。しかも日本の学校に行事がたくさんあった。体育祭、合唱祭、文化祭などいっぱいあって、友達と大変楽しい時間を過ごすことができた。新しい体験がいっぱいできて、自分の中がどんどん豊かになった気もした。そして私は相次いで音楽部とソフトテニスの二つの部活に入った。だから友達もいっぱいできた。校内でちょっと歩いたら、絶対知り合い何人かと顔を合わせるようになった。顔の広い人になったらいいなと憧れていたが、今の私もそういう人に近づくことができたのではないだろうか。

また、日本に来て、「ああ、やられた。」と思ったことも時々あった。自転車から飛んだり、階段から落ちたり、だいたい体力的な問題だったけど、こういう思いもかけない体験を重ねることで、心も強くなってきたのではないかと思っている。

そして最後に一つ、日本に来る前に、私はずっと同じ環境で生活していた。この社会は何かがおかしいか、何かがよかったか、よくわからなかった。しかし日本に来て、全く新しい環境で、今までとは全然違う生活を始めたことによって、生活に対する思いがどんどん変わってきた。普段の生活、普段の環境、お互いの国を比べることで、それぞれのいいところが見えてくる。変えていったほうがいいところとか、もっと発展させたほうがいいところとかも。

それに今まで気づいてなかった平凡な生活にある小さな幸せが見えるようになってきた。街灯の天辺に立っているカモメ、きれいな形になっている雲、屋根から落ちる雨粒。日本にいるこの十か月は、物事の美しさを見つける力を私に与えてくれた。中国に帰ってもこういう気持ちこういう心を忘れずに、世界の美しさを探し続けていきたい。

一年前、私は故郷から旅立った。この一年間、いろいろな始まりと出会う旅を続けてきた。そして今、留学生活が終わろうとしている。これからどんな未来が待っているか、わからないけれど、一つ一つの経験を活かして、新しい旅を見つけていきたいと思っている。



シアワセ色

DING Meng
京都市立西京高等学校／石家荘四十二中学
丁　夢

この世界に、60億人います。違う国であなたたちと会えて、友達になれて、もう奇跡だと思います。なんて話そうか考えましたけど、うまくはなせそうにありません。この一年間のことはそんなに簡単ではありません、私にとって、とても大切な一年だと思います。

最初日本に来た時日本語は全然話せませんでした。今でも初めて学校のクラスで自己紹介をしたことをはっきり覚えています。自分の名前とか簡単なことは話すことができるけど、でもクラスメートからの質問が全然分かりませんでした。ホームステイでも、学校でも、周りの人の事を分からないし、彼らの話は分からないし、考え方も違います。その時とても辛かったと思います。友達もいなくて、すごく困っていました。最初の三ヶ月真っ暗だ！

日本の高校と私の中国の高校はとても違います。中国の高校は部活があるけど、皆勉強が忙しいので、余り参加しません。私は運動があまり好きではありません。健康の為に運動するほうがいいと思い、テニス部に入りました。私はテニスが全然出来ませんでした。でも友達はとても熱心にいつも教えてくれました。テニス部の友達はいつも私のことを気にかけてくれていました。とてもありがたいです。そして、テニス部の皆試合の為に一生懸命練習していました。私は皆が真面目に練習している姿を見て、たくさん元気をもらいました。

家庭科は私の中国の学校にはないです。初めての授業の時、料理を作りました。私は料理を作ることが大好きなので、とても嬉しかったです。学校で勉強以外の自分の好きのことを友達と一緒にできることは、学生にとって一番嬉しいことじゃない？もし私の中国の学校もいろんな部活とか家庭科とかの科目があればいいと思いました。でも、それは無理かもしれません。（勉強がいそがしいです。学校の休みも少ないです。）やっぱり中国と日本は違います。

生活が楽しいけど、でもやっぱり自分が嫌なこともあります。前の私はいつも子供みたいに自分の好きなことだけやっていました。でも、日本に来ていろんな人と会って、たくさんのことを学んで、確かに前の私は間違っていたと思いました。そして、自分も反省しました。でも、最初の時、すごく困ったときがあり、寂しい時もあり、ホームシックにもなりました。その時、何もしたくなかったし、好きなこともしたくありませんでした。嫌なことはもちろん。やる気が全然なかったです。その時、私は日本に来て意味があるかないか分からなくなりました。「自分の選んだ答え間違いはない。自分が自分を信じなければ、誰が信じる。」その話を読んで、本当に心から感動しました。「できるか」「できないか」じゃなくて、「やるか」「やらないか」だと思います。昨日はもう戻らない、変わっていけるから。後悔するようなことをしたくない。そして「あきらめないで！これから好きな事でも嫌なことでも全て一生懸命やりたい」そう思って毎日頑張ります。

多分今の私と前の私はちょっと違うけど、これは成長だと思います。私はまだ歩いている途中なんだから。

日本、私の宝島

LU Yucong

鹿児島県立武岡台高等学校／石家荘外国語学校
盧　雨聡

去年の９月、私が日本に来て、鹿児島で留学生活を始めました。

今年の７月まで日本で過ごしたこの11ヶ月間、私の一生忘れられない思い出になり、大切な宝物になりました。

日本での生活は中国とぜんぜん違うものです。中国では、高校生のほとんどは毎日勉強や宿題に追い込まれ、自分の趣味の時間やゆっくりする時間なんかはとても贅沢なものに思えます。しかし、日本、とくに鹿児島ではみんなはゆっくりできて、いいなと思いました。それに、高校生のみんなは勉強ばかりでなく、いろんな部活動でも大活躍していて、すばらしい青春を送っています。そんな高校生こそが高校生らしいと思います。しかも、部活動は遊びではなく、みんなの真剣な態度と、一生懸命頑張っている姿に感動しました。

そして、学校ではさまざまな行事があります。体育祭、ロードレース、クラスマッチ、文化祭。いろんな行事でとても充実した学校生活を送りました。これらいろんな行事の中で、ただ楽しいだけではなく、私達自身も成長できました。６月の文化祭の時、わたしのクラスがモザイクの展示画を作ることにしたのですが、土曜日本番２日間前に、みんなが貼り終わった色紙はぜんぜん形になりませんでした。仕方なくやり直すことになってしまいました。でも、金曜日の午前で色紙を貼り終わらないと間に合わないし、200枚以上あるA4の色紙を貼るにはとても時間がかかります。でも、みんな誰も文句を言わず、木曜日の夜、みんな全部色紙を家に持って帰って、家で貼ってきました。そして、金曜日女子が色紙を貼りつけて、男子がその下に敷くダンボールを作りました。みんなで協力して作っていた姿はほんとうにかっこういいと思って、感動しました。これはまさにクラスの絆です。作品は結局賞を取らなかったけれど、私たちの心の中では最高の作品です。

学校だけではなく、中国とは違う家庭生活も体験できました。この一年間、ずっと松木場さんのところで、お世話になりました。ほかの友達は半年で５ヵ所ものホストファミリーに行ったと聞きましたが、私はずっと松木場さんの家に暮らすことができて、とても縁深いと思います。家では、いろいろ教えてくれる父さん、話してくれる母さん、大好きな涼子姉ちゃん、イケメンの文彦兄ちゃん、やさしい智浩兄ちゃん、私といろんな面で似ていて、話が合う菜月姉ちゃん、そして、２歳のかわいい甥の湊丈君もいて、中国ではなかなか体験できない６人家族で、にぎやかな家庭生活を送ってきました。ほんとうに楽しい毎日を過ごしました。

この一年間、私を本当の家族の一員として受け入れ、鹿児島のきれいなところに連れて行ってくれたり、おいしいものを作ってくれたり、鹿児島の歴史や方言を教えてくれたりして、ほんとうにありがとうございました。この一年、鹿児島で暮らすことができたのはほんとうにラッキーだと思いました。

この一年間、ほんとうに数え切れないほどいろいろな体験をさせていただきました。その中から学んだことは私の一生の宝となります。私の心の中で感動や感謝の気持ちで溢れています。ほんとうにありがとうございました。

こんな宝を見つけた日本は私にとっては宝島のようです。今は中国に帰りますけど、これからは、この１年間の体験に基づいて、もっと日本語の勉強をして、日中交流に自分の力を尽くします。

では、またね、日本。またね、私の宝島。

日本で変わった自分を省みると

WANG Jue
埼玉県立蕨高等学校／石家荘外国語学校
王　珏

一年前、日本に来る前日の夜、日本大使館の臼井参事官は歓送会で私と母にこういうような話をかけてくださいました。「留学生活で色んな困難が待っているんです。でも、困難を乗り越えると、きっといい勉強になりますよ！」その時の私は「この日本の方の日本語はうまいなあ！」と思っただけでしたが、この一年間を振り返ってみると臼井参事官の話の正しさに驚かされました。日本で自分の変わったところ、成長したところをまとめて書きたいと思います。

勉強についての考えが変わった

勉強の競争が激しい中国においては、学生にとって勉強は人生のすべてだと言っても、言い過ぎではないでしょう。こうのような教育環境で育ってきて、学年での成績順位だけに注目していた私は、日本に来て勉強の他のことで欠けていることはまだたくさんあるということに気づきました。来たばかりの時、クラスメートのことを知るために、よく「このクラスで成績が一番いいひとは誰？」「あの子の成績は学年で何位ぐらい？」のような日本の高校生にとって「とんでもない」質問をしました。友達は「日本では成績は秘密だよ！」と教えてくれて、「Aさんは部活何をやってるの？」「Bさんは何が上手？」という聞き方に変わりました。みんな自分に特有な得意なところがあるということが分かりました。勉強は人生の欠けない一部であるが、決して全部ではないです。時間のある時、教科書のことを忘れて、友達と映画を見に行ったり、買い物に行ったりして、他の人と交流し、知らなかった情報をいっぱいもらうことは、自分の能力を上げるためのいい方法かもしれません。

誰にも頼らない、心は強くなった

中国で一人っ子としての私は親に甘やかされて育って、「自立」という言葉とはるかに離れていました。日本に来た時の荷物は全部親が片付けてくれたから、ホテルで服を取るため、荷物を開けただけで閉められなくて、涙が出たことさえありました。でも、ホストファミリーで生活能力がどんどん上がってきました。自分で洋服をきれいに洗って、きれいに畳む時の興奮を忘れることができません。バレンタインのとき、一緒にお菓子を作って、友達に「女子力すごい！」と言われた時のうれしさを忘れることができません。それは全部ホストファミリーのお母さんのおかげでした！ホストファミリーに対して、いくら感謝してもしきれません。

生活能力だけではなく、心も成長しました。困難に会っても「お母さん、助けて！」「私にとっては無理だ！泣きたい！」と思わないで、笑顔で向うことができました。

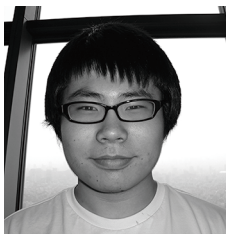
「友達」という言葉の理解が変わった

困る時、友達がそばにいてくれます。学校に来たばかりの私は何も分かりませんでしたが、みんな親切に日本の礼儀と習慣を教えてくれました。部活動のラケットとユニフォームに困った時、友達のお母さんが車で連れてくださって、短い間で全部揃えてくれました。ホームシックになった時、友達は「寂しい時は私に電話して！いつでも待ってるよ！」と言ってくれました。一緒にディズニーランドに行った時、みんなで「玉ちゃんこれ見て！」「玉ちゃんあれすごいでしょ！」と見せてくれました。

こんな時もあんな時も、友達のことを忘れられません。みんなから助けてもらった私もよく友達に勉強のことを教えたり、中国のお菓子をみんなに分けて食べたりしました。友達はお互いに助け合うはずのものだと分かりました。友達、ありがとう！

みんなへの感謝の気持ちを強く抱いた

一年間の留学で、感謝すべき人をあげればきりがありません。ホストファミリー、学校の先生方、ボランティアの方々、クラスメート、部活動の友達、、、、、みんなの思いやりは私をあたため、みんなの親切さは私の心を強くしてくれました。この国境を乗り越えた愛は私の最初に辛かった留学生活を今までの人生における一番の思い出にしてくれました。この感謝の気持ちを胸に、私も愛と友情の種　を中国の土地に撒いて、日中交流センターとの約束を守ります。日中青少年に友情のバトンを受け渡し、日中友好2000年の奇跡を次の世代に受け渡すために頑張ります！お世話になった皆様もぜひ中国に来てください！同じ親切さいっぱいの私は中国で待っていますよ！



忘れぬものを、記憶に刻む

MAO Zelong
立命館宇治中学校・高等学校／石家荘外国語学校
毛　沢龍

その手紙を見たとき、僕は不意にこう思った、いよいよだな、って感じ。でも、やっぱり帰りたくない。帰ってどうなるか、こんな真っ先のこと考えたくもないさ。本当にいろいろあったね。みんなと過ごした日々は決して忘れないって、こんな約束もしていた。だけどやはり人生って、別れが満ちているんだよね。「僕たち、もう帰っちゃうんだ～」って思ったら、この理不尽の人生を呪いたい。憎むといっても過ぎない。だがこんな無力な自分に何ができるのか？

一年とは本当に長くも短くもない時間だ。この記憶を刻むのは少々足りないが、また忘れることができない。本当、みんなはいろいろ教えてくれた。たぶん、こんなに楽しい時間は、生まれてはじめてかもって思った。今はもう、小さい頃のことがほとんど記憶に残っていない。なぜなんだろう？僕はよくわからない。だから、この大切な思いを、記憶に残りたい。

「終わりよければすべてよし」とはいえ、最初は本当にうまくいかなかった。僕はもともとコミュニケーションが苦手のほうなので、なかなかみんなとうまく付き合うことができない。どうしてみんなはそんなに冷酷なのかって、ついそう思った。もちろんいい人もいるが、やはり僕は答えを探しながら、毎日毎日迷いながらほぼ意味なくつまらない日々を過ごしました。本当にちょっとだけ考えることができる機械のようだった。毎日学校行って、授業して、帰ってから風呂入って、勉強して、ゲームして、そして寝る。今でも不思議に思った、僕はあの頃どんな無様の姿で過ごしたのかって。本当に僕の魂は堕落したようだ。誰も僕を助けようともせず、こんなに無力な自分は尚更だ。光の希望もなく、僕は無辺の暗闇で長く過ごしたのだった。

だが、今は断じてあの頃と違う。新しい学年を迎えて、僕は新しいクラスに入った。時はその頃から始まった。新クラスのみんなはとても優しくて、僕の心はすぐに希望に満ちていた。「みんなは優しいな～」って、そう思っていた。そして、やがて僕はいろんな友達ができた。僕と同じ趣味を持っている友達も、何人かいた。本当に、僕の人生はカラフルになったって、強く思っていた。だから、今は帰りたくない。始まったばかりではないか？

「この世界には永遠の出会いなどない、いつかきっと別れのときが来る。」本当にそうかもね。人は出会ったとしても、いずれ分かれる運命なのだ。だから、この「出会い」が消えちゃうまで、記憶に刻もう。たとえ分かれたとしても、出会ったことは、絶対に忘れない。僕もきっとみんなと出会ったことを忘れない、ちゃんと記憶に残ったから。

留学生活の振り返り

FENG Xinhe

松江市立女子高等学校／太原市外国語学校
馮　心鶴

一年間の留学生活がそろそろ終わります。私は日本で過ごした日々を振り返ると、この短い間に、新しい経験、楽しい経験、辛い経験、意義深い経験などが沢山でき、本当に数え切れない思い出が心の中に残りました。

そして、ふと笑みが零れました。幸運にも、私は日本で留学するチャンスを掴んで、日本に来て、いろいろな人と出会い、いろいろなことをし、とても楽しかったです。

私の留学先は松江という美しい所です。都会の賑やかさはありませんが、自然の美や歴史と文化の魅力を楽しむことができます。ホストファミリーに、お父さんとお母さんとお姉さんがいます。お父さんはとても親切な人です。日が短い時は、よく家の外にある街灯の下で私が学校から帰るのを待っていてくれました。暗い夜道に、街灯の光とお父さんの姿を見て、なんと暖かいと感じました。お母さんは料理が上手だけでなく、生活の知恵も沢山持っています。私はお母さんと観光地やコンサートなどに行ったり、話し合ったりして、日本の文化も教えてもらい、成長に大切な道理やアドバイスも色々もらいました。お姉さんは仕事で、会う時間が少ないですが、とても明るい人で、会う度に同世代の人のように私と遊んでくれました。それに、ホストファミリーの親戚と近所の人もみんな親切にしてくださいました。思い出すと、本当に感謝の気持ちで胸がいっぱいになり、楽しくて幸せだと感じました。

私が入っている学校は松江市立女子高校です。中国に殆ど女子高校はないので、ここで珍しい経験ができました。そして、私は学校の様々な活動に参加し、よい勉強になりました。ただし、学校で一番楽しいのは、やはり気が合う友達ができたことです。違う国籍で、違う文化の下で育てられた人と親友になったのは、私は以前想像もつかなかったので、すばらしいことだと思いました。一緒にお弁当を食べたり、宿題に取り組んだり、夢について話したりして、楽しい思い出を沢山作りました。

けれど、留学生活には楽しいことばかりではありませんでした。生活上の慣れない所や、学校に適応する過程や、部活動の大変さなどもありました。しかし、今考えたら、もう落ち着いて、笑顔で迎えられるようになりました。それも私が日本で成長した一つの証ではないかと思います。また、辛い時は、お母さんと相談したり、日中交流センターの先生に尋ねたり、友達と話したりして、悩みが癒されるうちに、絆も深まりました。

私は日本で五つの「宝」を得たと思っています。一つ目は思いやりを持つことの大切さです。日本人はなるべく周りの人が心地よくなるように気配りをしていると思います。サービス業からそれが分かるのはもちろん、ほかに例えば、私は一度留学生のために行ったフリーマーケットのボランティアに参加したことがあり、その時日本政府や市民の人が留学生に対する細かい思いやりを深く感じました。日本で見た気配りやしてもらった色々な思いやりをきっかけに、私ももっと周りの人のことを考えて、思いやりを持つようになってきました。

二つ目は日本文化についての知識です。その中では、私が一番印象深かったのは日本人が自然との関わりを沢山持っていることです。例えば、人の名前に、よく自然の物を表す字があります、料理は四季によって見た目や食べ物がずいぶん違います。私は日本人の自然に対する尊敬の気持ちや自然を楽しむ考え方がすばらしいと思います。日本の文化を学んで、私は沢山の楽しいことが分かりました。

三つ目は自立することの重要さです。初めて両親と離れて、日本に来たら、私はここで自分だけですることや、自分だけで決めることがだいぶ増えたと気づき、自立の大切さを感じました。それで努力して、もっと自立できるようになってきました。

四つ目は世界的な視野を持つことです。日本は私が行った初めての外国です。私は日本での交流を通して、視野が広がり、外国や世界についての関心も強くなりました。例えば、私はホストファミリーに連れてもらい、広島の平和記念資料館を見学して、とても衝撃的で、世界平和を守ることの大切さをしみじみと感じました。

日本で得た最高の「宝」は、言うまでもなく絆です。ホストファミリーとの、学校の先生と友達との、日中交流センターの先生と留学生仲間との、日本でお世話になった方々との絆です。その絆があるおかげで、私は楽しくて、忘れがたい留学生活を送ることができました。私は、「心連心」という名前が好きです。この留学事業を通して、本当にみんなの心が繋がってきたと思っています。

一年間を振り返っていると、いつしか目が潤んできました。時の流れは本当に早く、あっという間に別れの時間が近づいてきました。「心ちゃんが帰ったら、お父さんもお母さんも寂しくなるよ」と、ホストファミリーが言いました。「どうしてそんなに早く帰るの。ずっと一緒にいてほしいのに」と、クラスメートが言いました。私は感動しました。そして、「また日本に戻って来たいです」、「中国へ帰っても手紙を通して連絡しましょう」と言いました。その約束を果たそうと、心に決め、私は日本での思い出を胸に、中国でも頑張っていきたいと思っています。

美しい出会い

BAI Jiahui
和歌山県立那賀高等学校／太原市外国語学校
白　佳慧

知らぬ間に、もう6月に入って、私たちの留学生活ももうすぐ終りです。一年間、長く見えるんですけど、本当に一瞬のように短いですね。

この一年間を振り返ってみたら、本当に万感胸に迫ります。中国の友達と涙の別れ、一人で日本にきて、わくわくもあったし、不安も責任も抱えながら、戸惑いも失敗も乗り越えてきた毎日。ホームシックももちろんあったし、怪我もしたし、血も涙も流したし、この一年間本当にいろいろありました。楽しいことばかりではなかったんですが、得たものは本当にたくさんあります。

この一年間、一番うれしくて有難いのは、いろんな人に出会って、友達をいっぱい作ったことです。

最初、和歌山に来たとき、正直、ほんのちょっとがっかりしてしまいました。私は今まで都市で暮らしてきたので、東京か大阪のような都市に行きたかったけど、和歌山は田舎で、高層ビルも、新幹線も、朝から急いでる人もいなくて、野菜畑に挟んでる道、一時間に電車2本しかない小さな駅しかなかったです。景色は素敵ですけど、ちょっと寂しかったです。でも、田舎の和歌山でも、本気にぶつかれば、美しい出会いがいっぱいありました。毎日朝学校に行くとき、犬の散歩をしているおばちゃんが笑顔で“おはよう”って挨拶を交わしてくれることだけで、最高の一日になります。那賀高校の優しい先生たち、クラスメート、卓球部、茶道部、華道部のみんな、留学生たち、ホストのおばあちゃん、かわいいお母ちゃんと兄弟たちと猫のまややちゃん…みんなに出会って本当によかったと思います。みんなにいっぱいお世話になったし、みんな私のこと本当に愛してくれて、暖かく守ってくれて、本当にありがとうございます。もし都市に行ったら違う人々に出会って、違う人生を経験するかもしれないけど、私にとっては、この一年間出会えたみんなは私のこの一年のすべてであり、最高の美しい出会いです、和歌山に来て本当によかった、みんなに出会って本当によかったと思います。みんなに愛されながらこの土地を深く愛しています。

日本に来て、しみじみに心に刻んだ言葉は、絆です。この一年間、日本人とだけでなく、ほかのいろんな国の人とも出会い、友達になりました。よく考えたら本当に不思議ですね、私たちは違う国から来て、言葉も姿も違うけど、みんなお互い繋がって、すごくいい友達になれます、これは全部絆があるからです。生きてる世界が違っても、世界みんなの思いは一緒です。この一年間、本当にみんなと強い絆ができました、でもさようならは決して終わりじゃないです。私はみんなと過ごした日々を、みんなと出会った奇跡、この絆を感謝しつつ、永遠に忘れられません。そしてその絆を活かしながら、更に広げていこうと思います。それは私の生きがいとして、これからの進む方向にしたいと思います。

この一年間を通じて、一年前の自分を振り返ってみたら、以前の恥ずかしがりやの小さい女の子から、今の落ち着いた、ちょっと大人っぽくなった大きい女の子になりました。自分なりに少しは自立したかなと思いますし、家族と友達の大切さとか勉強よりずっと大切なものをいっぱい見つかったし、中国にいた時の勉強がすべての生き方ではなく、愛と感謝の気持ちに溢れられて、毎日を生きています。そして自分の夢ももう一度見つめ直しました。この一年間、悔いの残らないように日々大切にと思いながら、やっぱりやりきれないところがいっぱいありました。でも、とりあえずなんとか前に進んでいます。そして、悲しいことや辛いことも未来と繋がってあり、この一年間のすべてがいつか絶対に力になると信じています。

この一年間の留学のチャンスをくれ、ずっと私たちを応援してきた日中交流センターの先生たち、支え合いながらいっしょに頑張ってきた第六期生のみんな、いっぱい愛してくれた本当の家族のような日本のホストファミリーたち、そして何よりも私を生んでくれて、いままで愛してくれて、一人っ子の私と一年間も離れる寂しさを我慢しながらも私の自分のやりたいことを全力で支えてくれて、遠いところでずっと見守ってくれている両親、みんな本当に本当にありがとうございました。日本にきて、みんなに出会って本当によかったです。

さようならは悲しいことじゃない。この一年を生きてきた私たちは、今からこそ、夢へと、いってきます！

豊かな一年間、ありがとう

WANG Kaiyi
大東文化大学第一高等学校／済南外国語学校
王　凱易

去年の九月から日本に来て、もうそろそろ十一ヶ月経とうとしています。月日の経つのが早いですが、今から考えても、とても素晴らしい一年間だったと思います。

日本に留学することが決まった時、ちょうど去年の三月の東日本大震災が起きて、半年たった頃でした。私は不安と期待を持って日本にきました。

最初のころ、新しい環境になかなか慣れませんでした。日本語を四年間ぐらい勉強したのに、スムーズに話せなかったのです。もともと持っていた日本語への自信もだんだんなくなってきました。

だけど、ホームステイの家族と先生がすごく助けて下さいました。いつも話を聞いてくれて、いっぱい話せたので、少しずつ私の日本語力が進歩しました。

一年の間に、日本の文化、生活に関していろいろなことが体験できました。秋の花火大会、酉の市のお祭り、お正月のお餅つきと着物、春の桜、梅雨の季節。一衣帯水の地理位置だけど、この島国の日本の美しさ、日本人の精一杯の元気はとても深く心に残りました。

学校でも五キロのマラソン大会、ダンボールでいろいろなものを作り文化祭にも参加しました。遠足ではクラス単位で古都鎌倉にも行きました。古い歴史の雰囲気に囲まれている鎌倉は心が落ち着く感じがしました。私の班ではお互いに協力して、計画を立てて、コースを決めて、自分たちの力だけで、独立してできた特別な旅行みたいだったので、満足感もありました。

また、部活で茶道部や調理部にも入っているので、日本の習慣やマナーも少しずつ分かってきました。部活に入ったばかりの時も、やっぱり緊張していました。でも、友達から話しかけてくれたりとか、自分が勇気を出して話題を出してみるとかして、だんだんリラックスできて、普通の友達同士のようにしゃべれるようになりました。とても楽しい時間が過ごせました。

今月は学校の体育祭でみんな一緒に練習したり、ひとつのことを目標として、一緒に頑張っているのは本当に楽しいです。その目標が達成した時は成就感でいっぱいです。練習が続いて疲れていますけど、充実して過ごしている楽しさを感じてます。

最初のクラスで辛い時もあったし、迷った時もありました。そのことを体験してからはやっと何か自分に何が足りなかったかが分かってきました。

挫折なくしては心の成長は難しいかもしれません。

挫折はきっといつかまたくると思います。でも、今はそれに直面する勇気を持っています。

日本での一年を過ごして、たくさんの特別な思い出を作りました。最近、あと一ヶ月だけだから、よく友達に聞かれます。「ワンちゃん、いつ帰るの？終業式出られるの？」「帰る前にすき焼き一緒に食べに行こう！」多分中国に帰ってから、「ワンちゃん」と呼んでくれる人はいないでしょう。みんなが呼んでくれた「ワンちゃん」はすごく懐かしくなると思います。

みんなに呼ばれた「ワンちゃん」と「がいちゃん」の声をまた聞きたいです。いつもお世話をしてくれた家族や友達、心からありがとうございました。こんなたくさんの素晴らしい思い出を作ってくれてありがとうございました。絶対日本のことを忘れないで、この一年間の留学生活をもとに、これからの私の人生を豊かなものにしたいと思います。

11ヶ月の宝物

YANG Chengcheng

三重高等学校／済南外国語学校
楊　程程

家族の愛

2011年9月、あの蒸し暑い夏から、すべてが始まりました。私は台風12号と共に三重に来て、世古口一家と約1年間の生活をすることになりました。お父さんが言った初めての言葉は「お帰り、今日から家族だよ」と、今でもはっきりと覚えています。厳しいお父さん、優しいお母さん、穏やかなおじいちゃん、おとなしいお姉ちゃんと頑張り屋のあや。私はこの5人の家族ができてとても幸せだと思っています。

自分は、全く面倒ばかり引き起こす人だと思います。11ヶ月の中で、同じミスを何回も繰り返しました。家族のみんなに迷惑をかけました。そのせいで、お父さんにたびたび真剣に叱られました。　とても怖いですが、自分が本当の娘として思われていると、とても感じました。まさしく、愛の鞭です。そのお陰で、「日本人の心」「おもいやり」を、お父さんとお母さんからいっぱい教えてもらいました。自分が失敗するのは、忘れっぽいのではなく、他の人に頼りがち、自分の意識が低いことがわかりました。「嫌なことを先にしなさい」、「約束を破るな」、「嘘をつくな」、「お金の借り貸しをするな」、意識を高めるために、お父さんといくつかの約束をしました。本当に家族の意見を受け入れたい、素直になりたいという気持ちで頑張りました。でも、この11ヶ月間の中で、私は色々な選択や困難の前に立ち、迷いました。お父さんとお母さんは、ヒントを教えてくれますが、あとは私に任せます。言葉には出してないですが、陰で私のことをそっと見守ってくれて、一生懸命に応援してくれました。そのお陰で、京都や奈良、大阪にも行けたし、クラブの友達とクラスメートもうまくいっているし、自分なりにとても成長できたと思います。

お母さんのクリスマスプレゼントで、USJに連れて行ってもらったり、お正月にはお母さんの実家の名張のおばあちゃんの所に行き、お父さんには、お伊勢さん参りに連れってもらいました。

また、六家会のみんなとスキーに行ったり、春には桜の下でお花見したりしました。

家族は、私に多くの大切な思い出をプレゼントにしてくれました。さらに、私の誕生日の時、ケーキと心を込めたプレゼントをくれました。そのやさしい気持ちには涙腺が緩みました。

私は、お父さんに「なぜ初対面の時に『はじめまして』と言わなかったの？」と聞いてみました。するとお父さんは、「程程は、父さんの本当の娘だから、自分の娘に『はじめまして』とか『こんにちは』なんて言う親は、世の中にどこにもいないよ」と言いました。言葉ではなかなか言えないものですが、私は家族5人のことを誇りに思っています。家族のみんなのお陰で、海のものとも山のものとも分からない16歳に、一生に一度あるかないかの美しい経験をしました。とてもありがたいです。そして中国に帰ったら、1年振りの両親に「お父さんありがとう、お母さんありがとう」と言いたいです。おじいちゃん、おばあちゃんを大切にします。この11ヶ月間は、本当に家族ということの尊さを感じました。いつまでも「程程は家族だから」、そう言ってくれたお父さんの言葉を私は忘れることができません。

終わり、そして始まり

MI Chunhua
敦賀気比高等学校／済南外国語学校
米　淳華

あれからほぼ１年。来日研修の時の写真を目にすると、皆の幼い笑顔と恥じらいを含んだそれぞれの自己紹介の光景が、まるで昨日のことのように蘇ってくる。

「この１年間、私たちはどのような留学生活を過ごして来ただろう」

一字一句、心を込めながら作文を書きつつ私は考え込んでいた。この１年間という時の中には、たくさんの可能性が溢れていたはずだ。私たちは、この１年間の留学生活の中で、たくさんのことを経験し、たくさんのことを考え、たくさんの成長をした。人との付き合い方を学び、孤独に打ち克つことを学び、困難に耐えることを学び、感動すること・愛することの大切さを学んだ。

最初、クラスメートの言葉さえ理解できなかった私が、今では流暢な日本語で落ち込んでいる友達を慰めることができるほど、日本の高校生と同じような毎日を過ごせるまでに大きく成長していた。

成長したのは会話力だけではない。自分自身、自立した考えや生活を身につけることができたと思う。

この１年間、うれしいこともあり、つらいこともあった。しかし、いつでも私は強い信念を持ち、すべてのことに一生懸命に取り組んできた。それは、「自分を信じる」という信念だ。緊張しながら、つたない日本語で自己紹介をしていたあの時から、すっかり異国の生活に慣れきった現在まで、私はずっとその自信を失くさなかった。

自分を信じ続けて本当によかった。

しかし、私はたった一人で頑張ってきたわけではない。

寂しい時、「ここにいるから、何かあったら言ってね」と支えてくれた人がいる。分からない時、しっかり理解するまで丁寧に教えてくれた人がいる。部活の大会前、「一緒に頑張ろう」と励まし合った人がいる。疲れた時、「しっかり休んでね」といたわってくれた人がいる。

関わってくれたすべての人に感謝したい。本当にありがとう。

「ねぇ、いつ帰るの？」
「寂しくなるなぁ…」
「また、日本においでね！」

友達は私との別れを惜しんでくれている。

「桜は散るからこそ美しい」。日本の家族、日本で知り合ったたくさんの人、中国から一緒に来た同期生たちとの別れは必ずやって来る。その甘くて苦い思い出の中から抜け出すことのできない人もいるだろうが、こういう別れがあるからこそ、私達は成長できるのだ。別れは誰もが経験すること。そして経験して初めて分かることでもある。だから、今の私にできることは、「今」を握り締めることだけ。私の好きな歌の歌詞にある「今を生きていく」という言葉の意味も、きっとそういうことなのだろう。

日本で過ごした時間はたったの１年間だが、その思い出はきっと一生の宝物になる。

さようなら、日本。この「旅」はここで終わりはするが、私が学んだことや得た感動は途絶えることなく、これからの私の新しい「始まり」に繋がっていく。

私の一年

ZHANG Chi

沖縄県立向陽高等学校／済南外国語学校
張　馳

時間がたつのは早いものです。知らないうちに、留学生活もそろそろ終わりになります。この一年で、楽しいことや、辛いことがたくさんありました。それを振り返ってみようと思います。

沖縄に着いたとき、金曜日の夜でした。留学生で寮に入るという少数派になって、ホストファミリーと違って、寮でのすべてのことは、自分でしなければならないのでよくできるかどうかわからなくて少し不安でした。自分の部屋は一階にあるので、寮に入ったら、すぐつきました。部屋のドアを開けたとき、とても緊張してしまいました。部屋の中に七人の寮生がいました。みんなは笑顔で私に話しかけてくれて、とてもうれしかったです。ルームメイトのゆみはいろいろ紹介してくれました。お風呂に入ってから、夜中までずっとみんなとしゃべりました。私が変な言い方や、意味わからない言葉を言っても、みんなもちゃんと聞いてくれて、本当にやさしいなあと思いました。みんなのおかげで、留学初日の夜はとても楽しかったので、これからもこのまま順調にいけるという気持ちがありました。

同じ寮生の友達からたくさんの情報を得て、学年集会で自己紹介をしてもらうかもしれないことを聞いて、また緊張しました。先生たちの前で自己紹介をしたことがありましたが、約二百四十名の生徒たちの前でするのとはまったく違う気持ちです。みなさんは私の不安を知って、いろいろ意見を出してくれました。学年集会の前の日の夜に、みんなが直してくれた超簡単な自己紹介文を覚えました。「皆さん、おはようございます。はじめまして、張馳と申します。中国山東省の済南外国語学校から参りました。みんなと仲良くなるので、どんどん私に話しかけてください。どうぞよろしくお願いします。」と決定しました。その丁寧すぎた言い方は友達にからかわれました。それも今ではいい思い出です。

最初のころを過ごしたら、あとはだんだん順調に行きました。

大親友のみがと出会ったことが一番うれしいです。授業をうまく聞き取れない時期に、みがのメモを写したり、先生が言ったわからない言葉をわかりやすく説明してくれたり、一緒に祭りを参加に行ったりして、二人でとても充実した楽しい時間を過ごしてきました。みがを含め、一緒に弁当を食べるメンバー、「昼メン」というグループの皆さんとの時間もとても楽しかったです。みんなと仲良くなれて、本当によかったです。

学校行事も豊富です。陸上大会や、寮のクリスマスパーティー、武道大会、卒業式、遠足、インターンシップ、向陽祭などがあります。中国では体験できないようなたくさんありました。私たちの学校では、模試でさえ学校行事でした。その行事を通して、普段しゃべらない人とも交流をしたり、友達と協力して、物事を成功させる喜びを知りました。行事を重ねていくごとに、わたしはみんなと仲良くなったり、他のクラスの友達もできたりして向陽高校に馴染むことができました。

学校外の行事では、担任の先生の家でバーベキューしたり、ペンションに行ったりしました。

留学の一年は長いようで短くて、たくさんのことを学んだし、沖縄の人と深いかかわりを持てたし、これらの経験や思い出は私の一生のかけがえのない宝物となりました。これらの経験を生かして、もっと日本語や日本について勉強して、日本と中国の関係を保つ架け橋となりたいです。

家族と夢についての考え

ZHANG Xinyu

光ヶ丘女子高等学校／洛陽外国語学校
張　馨予

去年の９月から今年の７月まで、11カ月にわたる日本での生活を振り返ると、家族と夢についての考えは以前と違って、大きく変化した。

まず家族については次のような考えを持つようになった。

去年九月から今年の三月まで、私はホームステイを五軒経験した。最初は大変だったが、いろいろな家庭を経験させていただくことができて、今はありがたいことだと思っている。

中国では主婦が少なくて、夫婦とも仕事をする場合が多い。日本で、私は初めて主婦がいる家庭生活を経験した。それは私にとってなかなか新鮮な経験だったと思う。また、「家に人がいると、仕事で疲れた家族がほっとできる」という話も教えてもらった。確かに、家は人が安心する場所だ。

そのほかにも、「人生には、笑うことが必要だ。人には、家族や周りの人たちに笑わせるべきだ。」と、あるホストパパが教えてくれた。その家族の雰囲気は本当に楽しいものだった。一緒に暮らしていた私も、心から明るくなって、毎日笑顔で人に接することができた。

また別の家庭の両親は仕事がどんなに辛くても、子供の話をいつも快く聞いてくれる親だった。寝る時間がたった４時間くらいで、ほんとに大変そうだったが、自分の辛い気持ちを家に持ち帰らないで家族との時間を大切にしていた。その両親から、家族関係を大事にするため頑張るべきことがあると分かった。

帰ったら、私も家族に暖かさや楽しさを感じてもらえるように、頑張りたい、もっと大事にしたいと思っている。

次に、夢については次のように考えた。

ある日、友達が薬剤師になりたいと私に言った。それを聞いた私は、自分が何になりたいのかを真剣に考えた。結局、何が好きなのか分からないので考え込んでしまった。そして夢がないということに気づいたときとても悲しかった。そのときに、元日本語の先生がたくさんの人に意見を集めて、私に教えてくれた。それらは私にとって役立つ意見ばかりだった。

たとえば、「夢じゃなくて今は実行可能な目標を大切にしてください。無理に夢を探さなくてもいい。そのうちに本当にしたいことが見つかる。そのときそれを夢と呼んで大切にすればいい。」とある留学した先輩がそういって先生はそれを伝えてくれた。この一年間、私はたくさんのテストや日本語検定に参加して、いろいろなイベントにも参加してきた。それらは、夢に近づくことではないが夢と出会う道に頑張って歩いているということだといえる。

とりあえず実行可能な目標に勇気を出してまっすぐに歩けばいい。迷わず進む。

一年間で得たことは、千字では書ききれないと思う。新しい環境中で新しい視点が得られたこと、それが一番うれしかったことだと思う。

最後に、お世話になった先生たち、ホストファミリー、友達、すべての人に、感謝の気持ちをこめて、ありがとうございました、と伝えたいです。

留学できてよかった、日本に来てよかった。

<誇り>

CHENG Xin

神村学園高等部／西安外国語学校
程 忻

昨年の９月から今まで、もう１年近く日本にいます。最初のわくわく、期待、楽しみ、途中のがんばる、会いたい、さびしい、最後の悲しみ、矛盾な感情をいっぱい味わいました。このわずかな１年間は私の貴重な経験になりました

今、残っている時間はもう少ないので、大事に過ごしたいです。そして今まで過ごした日は、ずっと大切な思い出になります。その時の緊張感、うれしさ、かなしみ全部、心に入れて、何回も何回も味わいます。

初めての日に家に着いた時、家族の様子がちょっと不自然でした。それは両親がまじめな顔で私にいろいろなルールを教えてくれたことです。でも、その後に両親の性格が分かりました。皆でご飯を食べて、いろんな冗談を言って、好きな番組を見て、楽しいからです。家族の間では冗談を言っていいと言う事も、この家へ来て、私は初めて知りました。

うちの家族はとてもおもしろいです。私はにぎやかなのが好きだから。この家はもちろん好きです。お父さんは、見た目は厳しく静かな人だけど、実は他人の夢を壊すような冗談を言う人です。お母さんは私と同じ性格でおしゃべり好きです。お姉さんは一番優しく笑い好きです。弟は両親の性格がかんぺきに遺伝したちょっと意地悪な冗談を言う人です。この家で分かったことは、初対面の印象は本性と大違いだと言うことです。はじめて会ったときの両親とはぜんぜん違いました。

ここは毎日、桜島が見えるとてもきれいな所です。この家ではいつも休みのとき、車で色々な所へ遊びにいきますが、初めて桜島に行ったとき、イルカを見つけました。一匹じゃなく、いっぱいです。こんな景色はめったに見ないそうです。さすが私です。ケーキのために車で2時間もかけて宮崎にも行きました。ケーキはさすがにおいしかったです。そして、熊本に行って、おじいちゃんとおばあちゃんにも会えました。今年はお母さんの実家がある長崎や、京都にも行きました。私も寺が好きだから、大興奮でした。特に金閣寺と清水寺、私はめっちゃ楽しかったです。これこそ家族です。一緒にいれば楽しくて、全部私の大切な思い出です。皆は私の大切な家族です。家族が多くてうれしいです。だから、この家族は私の誇りです。

９月に来てから、学校では最初に運動会があるので、皆でそれぞれの練習をしました。体育の授業で練習をするとき、私は野球部の女の子たちを男の子だと思いました。背も高いし、かっこいいからです。運動会は各学年であるものを演じるので、皆は１ヶ月ずっと練習をしていました。11月にはいつもアニメで見ていた エンジェルスフェスティバル（学園祭）も実際にできました。いろいろな出店もあり、私はいっぱい写真を撮りました。

私の学校はスポーツが有名で、私はここではじめて、野球の試合を見る事ができました。学校のおかげで私ははじめて野球、サッカーの応援もしました。私の考えていたのとぜんぜん違います。相手の応援チームと交代でやりますが、手の動きとか、何を言うとか、全部、決まっています。

そのために、知らない歌や知らない選手の名前をいっぱい覚えました。応援は一番好きですが、学校の行事が多いので、私は色々なことを見て日本の高校生の生活にも詳しくなりました。行事がない日は先生たちと冗談を言いながら授業をしました。学校行事！試合に勝った時！私は誇りと思います。神村で良かったです。

ここで日本の人情、文化をいっぱい味わいました。私はもっと自分たちの文化を理解し、伝統を受け入れて行くことが大事だと思いました。だから、今回の留学は私の誇りです。家族も学校も私の一生の誇り。先生たちに感謝、私はここに留学して良かったです。都市部じゃなくても、あこがれの秋葉原でなくても、大丈夫です。そのかわりに私はもっと大事な物を手に入れました。私の誇りの家族と学校です。今、中国に行って来ます！でも、言葉の通り、また来ます。

留学生活の振り返り

CHEN Xiaoyue

京都両洋高等学校／南京外国語学校
陳　暁悦

京都両洋高校に来て、約11ヶ月が経ちました。この11ヶ月で、日本語だけではなく、多くのことを学んだと思います。

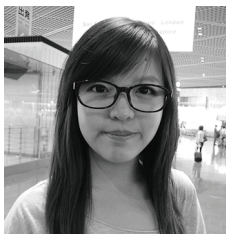
最初の１ヶ月はとてもたいへんでした。日本に来たばかりなのに、クラスメイトがほとんど海外研修に行ってしまったのです。友達もあまり作っていないし、寮生活も独り部屋だし、さびしいと思うことがたくさんありました。独り暮らしの経験がなかったので、このような寂しさは感じたことはありませんでした。でも、ずっとそう思っていてもしかたがなく、孤独は留学生ならだれもが経験しなければならないことなのだと気づきました。ですから、一人で悩むくらいなら、むしろ視線を移し、留学生活の楽しいところを探すようにしました。それからは、わたしはいろいろな観光地や博物館などに行くようになりました。一人で行くこともありましたが、自分で地図を見て目的地を探すのは、以前と違う楽しみがあると感じました。

この最初の１ヶ月はわたしにとって、今回の留学生活で一番大事な時間だったのではないかと思います。クラスメイトと会えず、日本語の水準もあまり上達しない期間でしたが、孤独を我慢することや、自分と向き合うことなど、人として大切なことを学びました。家族や友達がそばにいなくても一人で楽しく生活できるようになることは留学生にとって大切なことの１つだと思います。

クラスメイトが日本に帰国してからは、だんだん学校生活になれてきました。授業が通常に戻り、クラブにも入りました。日本での高校生活は、本当に充実していて楽しいものでした。みんなといっしょに、音楽授業でバンドを作って練習したり、体育の授業でダンスをしたりしました。ダンス部で京都府のダンス発表会にも参加しました。中国の高校と違うことをたくさん体験することができました。

学校生活以外では、休暇のときに何度かホームステイに行き、日本人の普通の生活を体験することもできました。日本料理を作ってみたり、家事の手伝いをしたり、初めてのこともホストファミリーに教えてもらってチャレンジしました。でも、ちょっと気まずい思いをすることもありました。ゴールデンウィークからよく泊めていただいたホストファミリーの方は、中国のことにとても詳しく、わたしと中日関係や台湾の問題など政治についての話をよくしました。やはり中国人と日本人とでは考え方が違うところがあるので、最初は少し困りました。でもこんな交流を通して、日本人の中国に対する考え方をよりよく理解できるようになり、自分の考え方もすこし変わりました。視野を広がったと思います。

わたしにこの11ヶ月の留学の機会を与えていただけたことに、心から感謝します。友達をたくさん作ることができ、日本語以外もいろいろ勉強することができました。目には見えない成長をすることができました。京都での日々は、何年経っても忘れられない思い出になりました。



ニッポン

LIU Qiyue
鳳凰高等学校／南京外国語学校
劉　綺玥

日本に来て、もう一年になりました。この一年間は私にとってほんとうに速いです。

鳳凰のみんなと最初に会うのが体育祭で、あいさつの前はずっと緊張していました。そのときの自分はひとりも知らなくて、みんなは私に対してどう思うか、ぜんぜん分からなかったです。クラスメートや先生が話すスピードが速くてアクセントも私がずっと勉強していた標準語と違って、ホームシックで何度も泣きながら両親に「あきらめて帰りたいよ。」と言いました。最初の一週間はつらかったです。でも、クラスメートは熱心に話しかけて、先生もホストファミリも親切だから、だんだん慣れてきました。

留学生活を通して、語学だけではなくそれ以外にもたくさんのことを学びました。

体育祭、文化祭、卒業式などいろいろなことを体験し、すばらしい思い出になりました。体育祭での万歳三唱はすごくびっくりさせられました。文化祭で宣伝をやっている人がずっと大声で「買いませんか」「食べてみませんか」「ありがとうございます」と言って、自分も感動で胸が熱くなって宣伝しました。

日本に来てから、以前教科書で学んだ「礼儀の国」という 4 文字が最も完璧な解釈だと思います。 特に鳳凰は厳しく先生に大声であいさつしたり、階段では急いで行かなければならない人のために左側通路を開けておいたり、全てが整然と秩序立てて行われているのには感銘を受けざるを得ませんでした。

学校以外で最も印象深かったことは横断歩道での出来事だった。日本の道を歩いて、交差点を渡るとき、車の運転者に譲られることです。交差点を渡ろうと思うときには、自動車の運転手と互いに見て、人が先に浅いお辞儀をしてから速く通ります。もう“自動車第一”の中国で育っていたので、“歩行者優先”の日本で礼儀正しい国だなあと感じました。

私来る前からずっと日本のリサイクルやごみの分類と回収に興味があって、環境保護意識の強いところも勉強になりました。かん、瓶、紙箱などゴミを厳格に分類して、街にゴミ箱がないにもかかわらず、道もすごくきれいです。

絆

ZOU Sendi

岡山県共生高等学校／南京外国語学校
鄒　森笛

「絆」という言葉、その意味が初めて分かりました。

「帰っちゃいけんよ！だって、スウ君がいなくなったら僕たちの理科の問題はどうすんだよ」友達は笑いながら言いました。冗談でも本気でも、友達の笑顔を見ている自分はなかなか笑顔で答えられません。中国にいる親や友達に会いたい気持ち、一方一緒に一年間暮らした日本の友達、そしてお世話になった先生たちと離れたくない気持ち、こんな矛盾した気持ちを友達にどう伝えればいいかわかりません。

2011年の夏、僕は日本に来て一年間留学することができました。岡山県新見市という名前も聞いたことのない小さな町で、僕の留学生活が始まりました。最初の何ヶ月に僕が入ったボランティアクラブの活動でとても忙しかったです。休みの日もいつもあちこちボランティア活動をしに行ったりしました。見るもの聞くものは何でも新しいですから、やる気満々でした。そして初めての連休、冬休みを迎えました。普段は学校の寮に住んでいる僕も冬休みの間にホストファミリーと一緒に生活することができました。ホストファミリーに泊まる時間は少ないですが、先生が教えてくれたマナーを忘れずに楽しい思い出を作ることができました。こんなふうに僕の留学生活が順調に続いていきました。

僕はクラスメートたちが大好きです。クラスに入ってからずっとやさしくしてくれて大変助かりました。そして、僕も仲がいい友達ができて、すぐクラスの一員になりました。みんな一緒に近くの公園へ遊びに行ったり、王様ゲームしたりして本当に楽しかったです。自分を彼らと結んでいるものは、この「絆」だと、僕は思います！絆というのは、心と心を結ぶもの、人と人をもっと仲良くさせるものでしょう。

僕と結ばれている人はクラスメートだけではなく、自分と同じように日本にくる交流センターの皆さんもそうであると思います。最初出会って東京でのただの短い四日間、それに中間研修、最終研修を通じても一緒にいられる時間はわずか二週間たらずです。でもほんの短い間で深い友情ができました。それぞれに抱えていた問題をお互いに助け合って解決し、応援します。一緒にすごした日々が少ないですが、もう一生の友達になりました。

むかしある日本のドラマで「絆」という言葉を初めて聞きました。意味ぜんぜん分からなかったけれど、超かっこいい漢字だと思いました。でも、今は少しずつ分かってきました。絆というのは、人と人を結ぶものです。自分の相手を好きだから、相手も自分を好きになってくれます。そして心結ばれていきます。

クラスメート、お世話になった先生、ホストファミリーのお父さんお母さん、あなたたちに伝えたいことがあります。僕はもうすぐ帰らなければなりませんが、この絆で私たちはきっとずっと「心連心」でしょう！

年、月、日

WANG Siwei
富山県立伏木高等学校／長沙外国語学校
王　思維

久しぶりに蝉の声を聞きました。それは一年経って、また夏はやってきた証拠です。時間があっという間に過ぎました。ここでの生活はもうすぐ終わるのです。

この一年間の留学生活は私にとって大変貴重な経験であると思います。みんなと話して一緒に笑う時もあるし、ちょっと寂しくて泣き出す時もあるし、日本語が上手く使えなくて困ってしまう時もあります。今振り返って見ると全部忘られない感動したことがいっぱいです。

一年間、両親の守りから離れて海外で生活しました。違う言葉、異なる生活習慣、いろいろ違う文化の下で生まれたもの、見慣れたものと全然違う世界。私はそれに慣れるために大変工夫をしました。たとえば富山の大雪、たとえば味噌汁、たくさん慣れないものは、この一年間で当たり前なことになっているみたいです。

私の行き先は富山県の伏木高校です。初めて学校へ行くときはすごく恥ずかしくて、みんなの前で自己紹介をするときは緊張して、何回も間違いました。その時、クラスメートがみんな拍手して「大丈夫だ」と言って、私を励ましてくれた。私が何かわからない時でも熱心に教えてくれて、ここで「ありがとうございます」と言いたいです。そこで同じくアニメが好きな人と知り合って、仲の良い友たちができました、友たちと一緒にカラオケへ行ったり、アニメのイベントへ行ったり、アニメを見たりとか、それは最高の幸せだと思いました。クラスメードだけではなく、学校の先生もすごく優しいです、特に村中先生（＝ｗ＝笑い）、この一年間お世話になりました。

中国と違って、学校の行事もいろいろありました。学園祭、球技大会、体育大会などいろいろありました。一番面白いのは体育大会と思います。体育大会のために、みんなが一生懸命頑張りました。いろいろ中国の運動会にはない種目もありました。もう一回やってほしいです！体育大会をきっかけに富山県伏木の民謡「帆柱おこし」という踊りを習いました。中国に戻って友だちに教えたいです。（>。<ちょっと恥ずかしい）

学校以外にもいろいろな祭りがありました、特に伏木地域の代表であるけんか山祭り、二つの山車がぶつかり合う、みんなが一緒に叫んで、とても楽しかったです。

楽しい記憶はたくさんありますが。

もうこれで帰ります……

心の中に切ない気持ちが溢れています。でも、私はまた日本へ来るから、その時はまた会おう、私の友よ！

帰国したら、私はこの一年間で見たことや体験したことや身に着けたことを中国の友だちに教えてあげます。これから私はもっと頑張って日本語を勉強して、日中友好のために力を尽くしたいです。

不思議の国の笑みちゃん

横浜市立みなと総合高等学校／長沙外国語学校
Yi Fan
易　帆

不思議の国のアリスはふわふわで真白うさぎちゃんにばったり会い、不思議な旅程が始まった。わたしは、ラッキーな心連心の列車に乗って、不思議の国に向って行った。

新しい制服を着たら、笑顔で自分に「よーい、新しい生活スタート!」と言いました。それから、わたしの不思議の国のドアが開きました。

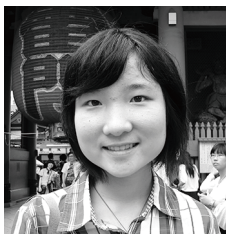
ダンス部に入って、毎日の練習で友情がどんどん深まった。学校の文化祭のとき、わたしははじめて不思議の国の舞台でダンスを発表しました。それに、わたしはみんなが協力して頑張っていた様子に感動しました。この間終わった体育祭も、私はクラスに溶け込みました。リレー、騎馬戦、二人三脚にでました。みんな、同じ目標で進んでいました。わたしは、「団結は力なり」と思いました。体と心が一つになり、これが心連心という意味かと思います。

不思議の国で相手とコミュニケーションするとき、わたしはいつもほかの人々にわたし自身を分かってもらおうとしました。そのことによって、自分も自分自身について改めて気がつくことができました。たまに相手に言いたかった言葉があったけれど、話ができなかったとき、相手の一生懸命理解する様子と励ましている目を見て、背中を押してもらっているような感じがしました。

わたしは、アリスよりも幸せだと思います。なぜなら、わたしは不思議の国で、たくさんのすばらしい人に会った。彼らは、みんな善良で、寛大なまなざし、根気良く話し続けてくれる気持ちを持っています。いつもわたしにあたたかい心遣いをしてくれた。いつもやさしく。いつもわたしのはじめての留学生活を受け止めてくれた。いつも根気良くいろいろなことをおしえてくれた。ホストファミリー、友達、先生、ヒッポ、みんなのちからでわたしは輝いています。いろいろなことがわたしの人生に刻み込んでいます。

わたしにとって、日本での327日間の留学生活は不思議の国冒険記である。327日間だけでしたが、思い出は数えきれない位ありました。これらを宝としながら、これからもこの絆を大切にしたいと思います。不思議の国で会った人々にはこの気持ちをいくら感謝しても、感謝しきれないです。わたしは将来日本と中国の架け橋になれたらと思います。お世話になったみなさん、本当にありがとうございました。

不思議の国冒険記、最高 !!



キセキ

LI Xueyuan
広島県立安芸府中高等学校／成都外国語学校
李　雪媛

六月になり、日本も梅雨の時期がやってきた。

いつものように、授業が終わってからみんなと文化祭の準備をして、いそいで部活に行って、そもそもこれは私の本来の生活だと思った。

初めて学校に来たとき、友達の笑顔。

秋に赤になった、窓外の山。

空一面に雪が舞う、静かな冬。

さくらがちらちら落ちる、学校の坂道。

テニスボールの打つ音、放課後の夕日。

初夏にザーザーと降り出した梅雨、友達と駅まで走り出す。

あっという間で私はもうそろそろ帰国するところになった。この一年間、本当にいろいろな奇跡的な出会いをした。

最初の何ヶ月、私は英語ができなくて、国際科の英語の授業は大変だった。だが、一緒に来たオーストラリアの留学生がいろいろ教えてくれて、そのときから私はだんだん自信を持つようになった。

私はできる、ということを日々自分自身に言っていた。

ホームシックの時に、いつもオーストラリアの友達と二人でしゃべって、いろいろな共通点があったが、友達は1月に帰国し、とても悲しかった。留学生が次々と帰国して、最後自分だけ残っているときは、すごく寂しかった。耐えられない時期もあったが、やっぱり周りの人たちに沢山支えてもらった。

私はひとりじゃないって、私はまだまだ行けると。

また、ホストファミリーは小さい兄弟がいて、中国に居る時は一人子だから、兄弟なんか全然いないので、日本で兄弟が出来てほんとうによかったと思った。私たちの出会いは本当に奇跡だ。

お母さんは毎日美味しい弁当を作ってくれて、妹と弟と遊んで、お父さんとおしゃべりして、まったく自分の家だと時々思った。家族と一緒に旅行したり、BBQをしたり、パーテイーをしたりした、小さい弟に綾取りを教えて、毎日楽しく過ごしていた。ホストファミリーのおかげで、私はいろいろな国の人に会えた。インドや中国やマラウイやマレーシアなどの短期留学生を受け入れ、いろいろな文化が体験できた。本当にありがたい。

私の本当の弟と妹みたいに、私にとってはとても幸せだ。こんな素晴らしい家族にあえて、私は一生忘れられないだろう。

今の学校は忙しくて、文化祭もそろそろやってくる。私は毎日居残って、みんなと一緒に文化祭の準備をしていた。最後に七時まで残って、やっと準備ができた。みんなと一緒に盛り上がって、変顔で写真を撮って、最後完成するときに本当に心中の喜びを抑えきれないのだ。

AKFはいろいろな行事があって、とても面白い学校だ。また国際科のみんなは優しくて、来たばかりなのに、たくさんの人から話しかけられて、友達をたくさん作った。

私の部活はソフトテニス部で、毎日遅くまで部活をしている。みんなと一緒に応援して、一緒にボールを打って、楽しい部活を送っている。最初に私は初心者だけど、先輩に毎日教えてもらったので、だんだんできるようになった。みんなと一緒に笑ったり、泣いたり、しゃべったりして、喜びや悲しさも全てみんなで分け合えて、こんな部活は中国で体験できないから、とてもいい体験ができた。

私は中国の留学生として、中国と日本の交流に役に立ったと思う。今の学校に「中国に行きたい、ゆきと遊びたい」っていう声がたくさん聞こえている。みんなに中国のことを教えて、とても嬉しかった。

「ゆきって、ずっとここに居るみたい。私たちと一緒に四月に入学して、ずっと一緒に過ごしてきたみたい。」といつも友達に言われている。「帰らないで、日本人になって〜」と聞くと、嬉しいけど、悲しみもある。みんなと離れることを考えたくないの、みんなと一緒に過ごした日々を深く心に刻んでいたい。

いつも、朝に空いてる教室から広島の町を見ている。

弟と手を繋いで、ゆっくり歩いた細道。

妹と宿題していた、小さなテーブル。

夜中にきこえた、雨の音。

ずっと一緒にいたい、一緒に笑いたい、日本のみんな。

この旅は短い、もっとみんなと一緒にいたい、来年も、再来年も、将来も、みんなと打ち上げして、盛り上がりたい。

この旅は長い、家族と離れ故郷と離れ、大変なこともあったけど、私はここまで来た。自分を鍛えることができた。

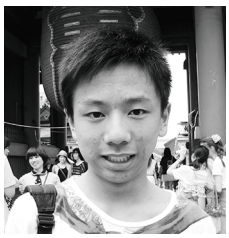
旅立ちの日は晴れてるとしたら、旅途中の日は嵐も強風もあったけど、旅終りはきっと晴れているだろう。

ぼたぼたと落ちる、夏の花火大会、いつか広島で見る約束した。

いつか、帰ると約束した、またお母さんにもらったサクラ柄の浴衣を着て、みんなと会う約束した。

私はまだまだ旅をしている。またいつか日本でみんなに会おう。

あした、きっと今日より笑顔になれる。



2011・2012

DENG Zhixiong

長崎日本大学高等学校／成都外国語学校

鄧　稚雄

昼ごはんのあと、気になった本を借りようと思って、図書館のお姉さんのところへ行きました。帰国真近のカナダの留学生の最後の発表を聞いたお姉さんは、目が赤く、涙を浮かべていました。「一年はあっという間ですね。」と彼女がつぶやきました。

「そうですね。一年は速いですね。」と私も思いました。

01

去年の8月から、今まで、もう10ヶ月経ちました。今思い出して、東京から長崎への飛行機を待っている時が、何だか昨日のことのようです。空港の大きな窓と、テレビを観ている人々や、迎えに来てくれた教頭先生の姿も、はっきり覚えています。いつかまた長崎への飛行機に乗れるかな。

長崎に着いたのはもう夕方でした。夕日の中を、教頭先生が運転する白い車に乗って、海のそばの道を走っていました。すがすがしい風を感じながら、緑の田畑や、だんだん淡い赤に染まる空が目に飛び込んできました。寮のご飯に間に合わなかったので、先生の奥様から晩ご飯のご招待を受けました。生姜焼きが上手な奥様がこのあとの「お母さん」になるとは、あの時は想像もできませんでした。これこそ世にいう「ご縁」なのでしょう。

02

H先生は寮の先生でした。土曜日に、寮監室でインターネットを使っている時に、ときどき、H先生と話しました。H先生はよくお茶をいれたり、梨を切ってくれました。

H先生の白いマグカップは鈴をつけた猫とネズミの絵が描かれており、私に濃い褐色のお茶をいれてくださり、それはちょっと甘い香りがしました。

ピカピカのお皿の上に、きれいに弧を描くように並べられた梨はみずみずしくて、ペロリと食べてしまいました。

風がそよそよ吹いて来て、ドアに掛けた風鈴が揺られやさしい音を出しました。黄色になったイチヨウ、と赤くなった木の葉。それなのに天気は夏のように暑く、セミの声もまだ残っていました。

03

初めの1ヶ月はお金を引き出す銀行の場所がわかりませんでした。サイフのお金が残ってなく困っていた時には、中学校事務室のWさんが「使っていいよ」と千円を持たせてくださいました。次の日、日本史の授業の時、事務室のYさんが郵便局へ、お金を引き出しに、一緒に行ってくださいました。この時、昼ごはんに間に合いませんでした。担任の先生に遅れましたと言うつもりでしたが、先生はいませんでした。その時、国語の先生からビスケットをもらいました。冷水器のそばで、パクパク食べながら、先生の親切がとても嬉しかったです。なぜなら、国語の授業ではよく寝ていた私なのです。

04

12月1日から、教頭先生の御宅に引っ越ししました。寮からの荷物を持ち、歩いてわずか5分の距離ですが、とても長く感じました。ドキドキしながら、先生の家のベルを押しました。先生が迎えてくださり、「これからは家族になったので、ベルを押さず直接入って」と言われました。

12月の長崎はそんなに寒くないし、川には、ロシアから冬を過ごすと言われる鴨がいます。太陽はもう南半球へ行ってしまって、雲も積んで来ました。新しい家族ができて、私はそんなに寒さを感じずにすみました。

味噌汁は飲めない、魚も苦手、靴下はあちらこちらに脱ぎ捨てる、朝からバタバタと学校の準備をするなど、私が自覚してなかった癖は全部お母さんが見つけてくれました。時々、見兼ねたお母さんが部屋の掃除をしてくださいました。

中間研修の時、一人で高速バスに乗って、福岡空港に行きました。バス停までお母さんが送ってくれました。自分の息子を見送るような目をして、バスが動き出すまでいてくださったお母さんのやさしさがとても嬉しかったです。

05

事務室のKお姉さんのおかげで、日本のあちこちも行くことができました。

おしゃれな原宿で、昼ごはんも食べる時間がないくらい、一日中買い物しました。

曇りの日に登った東京タワーと雨の日に行った横浜の山下公園。

沖縄で見た青い海と海岸で遊んでいる子どもたち、

風で揺れている観覧車にも乗りました。何回も行った焼肉の清香園ではKお姉さんは自分はあまり食べず肉の大好きな私のために、焼いては、私の皿に置いてくれました。

5月はKお姉さんの誕生日でした。一緒に見に行った桜の花びらや思い出の言葉を書き入れ、一つのアルバムに作って、誕生日プレゼントとしてあげました。Kお姉さんはとっても喜んでニコニコ笑って、たくさんの人に見せていました。

06

長崎くんちには、UさんとMさんと一緒に行きました。いろいろ大きな船を見ました。オランダの船も、中国の船も。中国の唐服を着ていた日本人は長いポニーテールも作っていました。異国で自国のものをみると、心の中は、暖かい風が吹き込んできました。

桜菊祭の時、ファッション雑誌から切ったモデルの顔を飾り付けとして、窓に貼りました。机、椅子とダンボールで小さいジェットコースターを作りました。

球技大会での声援、合唱コンクールで歌った歌や、読んだ詩など、まだまだ耳に残り、目を閉じれば情景が浮かんできますが、それらは過去の出来事になりました。

07

雪がとけて、川の水がちょっと増えました。

高1から高2になった一年
十五歳から十六歳になった一年
周りの方からいろいろ教えてもらいました。

以前の私と今の私の間に、いろいろ小さいことが埋められました。これらは、全部、あなたたちがくれた愛でしょう。

宝物

LIU Danli

静岡学園高等学校／成都外国語学校
劉　丹荔

去年の九月、中学校卒業したばかりで15歳の私は初めて日本に来ました。

そして、それから11ヶ月後の今、私たちの留学生活が終わり、この土から離れていくこととなります。

11ヶ月前、不安と恐怖と伴うに、私は東京から静岡に向かって出発しました。夕日影を浴びている富士山と徳川家康が住んでいた駿府城、それらはたぶん、この都市の代名詞とも言えるようなものです。かつてそう考えていた私はここで一年間生活していたから、もっと大切なものを見つけました。

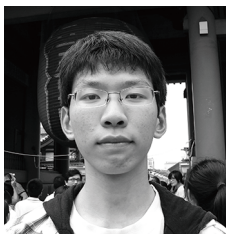
最初、日本に来たばかりの私はいつも黙っていて、周りのひとにすごく迷惑をかけました。だけどホストファミリーの人ひとたちがみんな親切にしてくれて、日本のことをたくさん教えてくれました。学校の先生からもいろいろなところへ連れて行ってもらいました。長い間、本当に皆さんからいろいろお世話になりました。ありがとうございます。

人の一生を70年だと考えれば、日本にいるこの一年間の留学生活はその七十分の一です。短くも長くも無いんですけど、この記憶は一生の宝物となるのを私は信じています。なぜというなら、その人たちとの出会いがありましたから。

もちろん、この一年間は楽しいことばかりではありません。つらい事もたくさんありました。ホストファミリーのやり方はそれぞれ違うところもあるし、食べ慣れていない食べ物もあるし、こんなことそんなことで誤解してトラブルになったこともあります。そんなときは、日中交流センターの先生たちがたくさんのアドバイスをくれました。しかしそれを乗り越えないといけません。それにそれを乗り越えることができるのは自分だけです。一年間の時間をかかって、私はそのことをはっきりわかりました。大好きな国ですから。大好きな人たちがいますから。今この私ができるのは、孤独と悲しみを乗り越えたこの一年間、日本での見聞を中国に帰ってから、もっと多くの人に教えることだけかもしれません。噂とかを通じるのではなくて、自分の目で確かめた真実をもっと多く人に伝えます。

人は人との出会いによって変わります。この一年間で完璧ではないかもしれませんが、最高な自分を作りましたかと、私は自分の心にこう問いました。

はい。



一衣帯水の隣邦に対する感想と展望

DING Jiayu
大阪府立夕陽丘高等学校／成都外国語学校
丁　嘉語

今年は中日国交正常化が実現されてからの40周年になりました。両国政府と人民も中日の友好事業のために、多くの心血を注がれました。僕自身も日中関係に有意義なことをやりたいと思って、それで、2011年9月、僕が日中関係の架け橋に行動し、両国関係の新たなページを開く志望を持って、日本国際交流基金日中交流センターの心連心交流活動を参加しました。日本の大阪に配置され、夕陽丘高校に通っていました。それで、素晴らしい一年間を過ごしました。

初めて日本に対するイメージはよかったです。街もきれいだし、みんな交通規則を守っているし、障害者に対する保護もかなりよかったです。でも、これがいちばん最初のイメージ、表面的な日本です。日本での生活と学習が続けて、こころを使ってコミュニケーションして、どんどん本当の日本を了解しました。

僕が一年間ずっと藤本さんの家にホームステイをしていました。日本にこんなに親切、こんなに日中関係に気にして、自分の全力を尽いて対外交流をやるファミリーに出会うのは、本当に幸福でした。藤本さんの家族は、外国との交流を自分の最も大事な事業として行動しています。心連心交流活動の中国留学生だけでなく、世界各地の留学生でも受け入れています。これが、すごく偉いと思ってます。日常生活上には、藤本さんは本当に僕を外人と思わずに自分のこどもに対しています。たとえば、僕が最初そこに行くときは、僕自身の好き嫌いを聞いてもらった。僕がしょうゆが嫌いですのでごはんを作るときはできるだけ避けています。生たまご僕はぜんぜん食べられないですので、藤本さんが自分大好きでも、作らないようにしていました。自分が好きなものを食べないで、我慢していました。日本人にイメージアップしました。たぶん、これが日本の優秀な人々の縮図である。

僕が通っている夕陽丘高校はすごく歴史があって、国際交流の歴史も長いです。先生たちも優しいし、生徒たちもかっこいいです。僕の担任の先生は僕のことがかなり関心しています。いつも僕の最近のことを聞いています。たとえば、廊下に先生と出会ったとき、先生も“最近はどう”と聞いて、本当に親切です。学生たちもみんな熱心でした。僕がひとつのことに感動したことがあります。学校の体育祭のとき、うちのクラスは自分でダンスの服装を作ります。家にはミシンがないので自分で手で縫います。それで、よくできていません。クラスの女の子が見たら、みんな僕に助けてくれました。このことに本当に感動しました。自分迷ったときは、いつもたくさんの人が助けてくれます。自分と親のようなクラスメートたちは、こころとこころが繋がっている、つまり、心連心です。こんな若者たちがいるので、日中関係の未来には絶対によくなります。

国際交流のひとつ大事なことは、自分本国のいいことを紹介しなければなりません。僕がホストファミリーといっしょにひとつのボランティア活動“鴫野日本語交流教室”に参加していました。日本人と中国人だけでなく、他の国々の人々も参加しています。中国のいいことを紹介しました。僕は学校でも家でも、たくさんの人が中国の素晴らしいことが了解するように、行動しています。

違う国は違う文化があります。日本と中国の文化が同じことがありますけど、違うこともあります。どのように異国の生活と勉強に慣れるのは、大事なことである。1955年、周恩来総理はバンドンで開いたアジア・アフリカ会議には、“求同存異”という理念を提出しました。“一致する点を求めて、異なる点は残しておく”という意味です。僕自身が、こういう考え方が国際的な交流についてかなり大切なのです。例えば、日本の学校には学生と先生全員スリッパを履いています。中国とぜんぜん違っても、日本人のその習慣を尊重しなければいけません。そのようにやれば、違う文化の人々に交流しやすくなります。

20世紀初期、たくさんの中国人が日本に留学しています。その中、早稲田大学で勉強した中国共産党の元老、李大釗先生は“为世界进文明，为人类造幸福，以青春之我，创建青春之人类”（世界文明をつくり，人類に幸福をもたらし、青春のわれを持って、青春の人間を創造しよう）と言いました。それが、青年たちに言うことばです。両国の青年は、日中両国友好進める新しい力です。日中友好の未来は、私たち、青年たちが切り開きます。中国の慣用句と言えば、更上一層楼です。私たちが共に日中関係をもっと美しい未来を作り上げ、共に世界のもっと美しい未来を作り上げていきます。

《受入校からのメッセージ》

留学生の受入れマニュアルとは

立命館中学校・高等学校　教諭　淺川　行弘

私がこの日中交流センターの事業と関わらせていただいて今年で3年目になります。この事業の素晴らしいところは、日中交流センターのスタッフの方々が本当に献身的に中国からの留学生のお世話をされていることと、過去の経験に裏付けられているのでしょうか、受け入れシステムが完璧に整備されているところにあると思います。日中交流センターのご担当の皆様のご苦労に心より敬服いたします。

今現在立命館高校には7期生の雒さんを加えて計6名の長期留学生が学んでいます。留学を通して留学生自身が日本人・日本語・日本文化への造詣と理解を深めるのみならず、学習活動や部活動で日々多様な価値観を持った留学生と接している本校生の成長にも目を見張るものがあります。留学生の受け入れ（もちろん派遣もしかり）は学校関係者の苦労を厭わせない魔力があるように思っています。

いずれの学校や受け入れ団体においても留学生の受け入れに際して一番苦労することは、ホストファミリー探しだろうと思います。学校のプログラムは、留学生自身と日々接し、彼ら彼女らとのコミュニケーションを通して、お互いの努力と工夫で如何様にも改善することか可能ですが、ホストファミリーに関しては、各ご家庭のご理解とご協力にお願いするしか方法がありません。特に、それが1年の長期ともなれば尚更です。

本校では東北育才学校からの留学生を毎年受け入れています。毎年来られる生徒は、優秀で学習意欲が高く、加えて、事前に先輩から立命館の情報や方針が伝わっているのか、本校生徒の中にすぐに溶け込んでくれます。これも継続的に同じ学校から受け入れていることのメリットなのかもしれません。受け入れる側の本校でも、中国からの留学生に対する期待感と信頼感が持て、お陰様でこれまでなんとか順調にホストファミリーをお願いすることができてきました。

6期生の焦さんも期待通り、好奇心旺盛で積極的に何事にも取り組む素晴らしく意欲的な生徒でした。卓球部や書道部に所属し運動や学習活動に意欲的に取り組みました。特に学習面では後半の半年間は、SSC（スーパーサイエンスコース）のクラスで彼女が得意にしている理系科目を集中的に学習したのみならず、立命館大学の先生の講義を受講することもできました。

彼女は、結果的にホームステイ先を3回変わることになりました。最初は中国上海出身のご家庭でした。在日期間が長きにわたっているとは言え、中国人の留学生に中国人のホストファミリーは如何なものかと私自身自問し続けていたのですが、焦さん自身にとってはある意味スムーズに日本社会に溶け込む手助けとなって、これはこれでよかったのかと思えるようになりました。もちろんそのご家庭が素晴らしいご家庭であったことが大きかったのだと思いますが。2軒目は受け入れにベテランのご家庭で同じくとても暖かく引き受けていただきました。そして3軒目は、長期の受け入れは初めてのご家庭でしたが、純日本式の生活スタイルと教育方針でホストしていただき彼女にとっては貴重な日本体験ではなかったかと思っています。その3軒目のホームステイ先に代わってしばらくして、焦さんが学校で泣いていたことがありました。ホストファミリーにあることでひどく叱られたとのことでした。お互いの理解とコミュニケーション不足から生じたカルチャーショックが来日して半年以上経って起こったということです。なぜそうなったのかをそれぞれがしっかり話し合い、お互いに理解し納得ができたことですが、そのような経験も、形の違いこそあれ、留学には必ず起こりそして克服すべき事柄なので、真の意味で彼女の留学が成功した瞬間ではなかったかと思っています。3ヶ月毎にホストチェンジをしたことは、焦健さんには少し辛い思いをさせたかもしれませんが、それぞれに異なったご家庭にお世話になったことで、ある意味彼女にとっては素晴らしい経験となったのではないでしょうか。

留学生を受け入れることにマニュアルはないと思っています。あるとすれば一期一会の出会いを大切に真心込めてお互い真摯に向かい合い接していくことが唯一のマニュアルなのかもしれません。焦さんにとっての今回の留学がこれからの彼女の人生にとってかけがえのないものであって欲しいと心から願っています。

《受入校からのメッセージ》

本校４人目となる中国人留学生を受け入れて

敦賀気比高等学校　教諭　浅田　真由美

本校は普通科進学コースの中に中国語の選択授業があり、３年間で約600時間の中国語を履修します。進学コースは、文武両道を実践しながら進学を目指す生徒が在籍するコースで、中国語を選択している生徒は１学年約25名、全体で約70名程度になります。

その中国語選択生徒の刺激に少しでもなればいいという思いから、平成20年度から中国高校生長期招へい事業に参加させていただき、平成23年には本校４人目となる中国人留学生の米淳華さんを受け入れさせていただきました。

敦賀駅に到着した米さんを教頭と２人で出迎えに行った時、なんて目がパッチリとしていてかわいい顔をしているのだろうという第一印象でした。回族だとお聞きしていたので、そう言われればイスラム系の顔つきに似ているなと感じました。

「你累不累？」

中国語で話しかける私に、流暢な日本語で返されたのもよく覚えています。外国人が話す日本語のような独特のクセがなく、あまりにも自然な日本語でびっくりしました。

同時に、この子は今までの留学生とちょっと違うなという予感がしました。

米さんは、私が担任をする進学コース２年３組に入りました。クラスの生徒の約３分の１が中国語を勉強しています。

「你好！」　「请多关照！」　「再见！」

最初は頑張って中国語で話しかける生徒もいましたが、案の定、自分の語学力の自信のなさと、米さんの日本語能力の高さに押され、次第に会話はすべて日本語になっていきました。

この子がただ者ではないと実感したのは、登校開始後すぐに行なわれた９月の実力診断テストです。米さんは２学年進学コース（72名）中、３教科総合でいきなり４位になりました。国語の点数が振るわないのは当たり前ですが、英語・数学の能力が抜群に高く、このようなすばらしい順位となり、周囲を驚かせました。

暖かいホストファミリーとの暮らしのおかげで、米さんの日本語能力も飛躍的に上達し、１月に行なわれた２回目の実力診断テストでは国語も高得点を取り、３教科総合ではついに進学コースでトップになりました。

そこで、米さんのためによりレベルの高い学習環境で学校生活を送ってもらおうと、３年進級後は有名国公立大学進学を目指す生徒が在籍する特別進学コースに移ることになりました。特別進学コースは進学コースと雰囲気もまったく違い、授業の難易度も高く、学業面においてかなり厳しい日々になるはずでした。

しかし、米さんはそこでも、努力を怠らず、日本人生徒の中にただ一人混じり、一生懸命授業に付いていきました。

米さんを受け入れて感じたのは、学習能力の高さだけでなく、人間として質の高さです。

善悪をしっかりとわきまえ、周囲に決して染まらず、心の中にぶれることのない強い芯を持ちつつも、周囲に合わせてもいける協調性を持っていました。

「決してスカートを折って短くしてはいけません」

私が登校初日に言ったこの言葉を１年間当たり前のように守り通し、日本人生徒の誰よりも美しく本校の制服を着こなしていた米さん。

清掃時、周囲の生徒がどんなにサボっていても、時間いっぱい黙々とモップをかけ続けていた米さん。

おそらく、この１年、異国の地で悲しいことや泣き出したいこともあったでしょう。しかし、どんな不平不満があったとしても、決してそれを表に出さなかった米さん。

無条件に教師を信じ敬う心、自分を向上させるため何事にも真摯に取り組む姿勢……まるで、とうの昔に日本人生徒が忘れてしまった心や姿勢を米さんは持っており、私達教師にも新鮮な感動を与えてくれました。

今年は、尖閣諸島問題も起こり、日中関係は良好とは言えない年となりました。中国各地で反日運動も起こり、そのようなニュースを耳にすることで、中国人に対して偏見を抱く日本人もいたかもしれません。

しかし、米さんと関わったことのある私達は、中国人の愛国心、大らかな心、勤勉さ、すばらしさを十分理解しています。

2006年から始まった「心連心：中国高校生長期招へい事業」も今年で７年目を迎え、受け入れ実績は現在日本にいる７期生を含め237名にのぼるそうです。

中国全土から集結したこの友好の種が日本各地に散らばり、近い将来、両国を結ぶ平和の木となることを願っています。

《ホストファミリーからのメッセージ》

父さんの娘

三重県ホストファミリー　世古口　良治

「程程、使ってたお茶碗とお箸、どうする？」
「ん〜。置いといて。帰ってきたらご飯食べなきゃいけないから。」

帰国前研修を控え、320日間の思い出の整理をしている時の父娘(おやこ)の会話です。
程程の言ったこの一言に、ただでさえ涙腺の弱い私に、たちまち熱いものが襲ってきたことは言うまでもありません。
さらにこの一言は、寝食を共にしてきた真の娘としての証ではないでしょうか。

今般、ご縁あって中国人留学生のホストファミリーをさせていただきました。
これまでに２回ほど2泊３日程度の受け入れの経験はありましたが、これほど長期の受け入れ経験はありません。我が家へやってくる留学生自身もたくさんの夢と希望を抱え、一方で不安もある、私たち家族もまったく同感でした。
特に私の場合、不安だけと言っても過言ではありません。
私自身、その不安を払拭するにはどうすればいいのか？、夢と希望に満ち溢れた留学生とどう接していけばいいのか？
悩みは絶えません。考えれば考えるほど湧き水のごとく溢れてきます。

しかし、所詮は単純構造の私です。何も難しく考える必要はなかったのです。
我が娘とおなじなのです。程程も娘なのです。
程程のために真剣に褒めました。真剣に叱りました。程程とともに真剣に笑いました。真剣に泣きました。

幸か不幸か、程程は我が家で320日間を過ごしました。
程程の日本での一番の想い出は、「父さんに叱られたこと」のようです。
私は、これで良かったと感じています。
僅か16歳の少女が親元離れて異国の地での生活。自ら選んだ道とは言え、苦しんだことでしょう。悩んだことでしょう。
その苦しみや悩みを、何でも打ち明けてくれました。相談してくれました。共に苦しみ、共に悩んだ320日間でした。

程程が通っていた学校の校訓は「真剣味」です。程程が所属していた伝統あるバレーボール部の部訓は、「心と絆」です。
そして程程は、「人間味」という表現を使ったことがありました。
嬉しかった、本当に嬉しかったです。

一粒の種からたくさんの花が咲きます。
その種をくれた人に感謝しながら、これからの人生を歩み、たくさんの花を咲かせてくれることを願ってやみません。
程程は自慢の娘、今はただ、「父さん、ただいま」と、素晴らしい笑顔で、ご飯を食べに帰って来る日を、ひたすら待ち続けている私です。
程程、ありがとう。
そして、お世話になったたくさんの方々に心から感謝しております。
本当に、ありがとうございました。

《ホストファミリーからのメッセージ》

第６期生　程 忻さんを受け入れて

鹿児島県ホストファミリー　後藤　光宏

今回は貴重な体験をさせて頂き、有難うございました。

当初、留学生受け入れの話を頂いた頃は、その受け入れ自体や期間に関して、周囲からは良くも悪くも色んな意見がありました。それは人それぞれ考え方の問題でしょうから、私たちは何の迷いも有りませんでした。そもそも受け入れを決めた切っ掛けが、以前から我が子に国際交流の場を設けたいと思っていた所、学校で受け入れ先を探されているとの事でしたので、申し出させて頂きました。どちらかと言うと、この様な制度が有る事を知らなかった事、知っていても切っ掛けが作れない等、なかなかこの様な機会にめぐり合う事は少ないので、良いタイミングだったと思います。

しかし自宅から生徒が通う学校まで非常に遠いので、生徒自身に負担が掛かるかも知れないと思っておりましたが、周りにも同じ環境の生徒が居た刺激からか、一回たりとも遅刻・欠席する事なく元気で無事に通ってくれた事、また怪我や病気が心配でしたが、それも無く10ヶ月余り健康で過ごせた事も、一番の役目達成感を感じさせてくれました。これも偏に先生方、心連心の担当者方たちの細かいサポートが有ったからだと感謝しております。

宿題や勉強に対する姿勢では、選考されて来る優秀な生徒だけあって、集中力だけはさすがに凄い物を感じました。中国では高校に入るまでは、寝る間を惜しんで努力をしていたそうで、それだけの力は持っていた様ですが、こちらに来てからはその反動も有ってか、宿題のみ粛々とこなす程度の学習量だったので、当初予想とのギャップも感じました。同じ高校に留学した過去の生徒とは少し違うとは聞きましたが、勉強の面ではこちらの対応方法も、もう少し考える必要が有ったのかも知れません。しかし当初は日本の歴史にもさほど興味を示して居ませんでしたが、京都・奈良の寺社仏閣巡りでは、興味を示してくれましたので、僅かなりとも連れて行った甲斐が有ったと感じています。

性格的には積極性の有る生徒だったからか、私たち家族の親戚や友人とも打ち解けあい、自ら話し掛ける事も多かったので、コミュニケーションは十分に取れていたと思います。

勉強も去る事ながら、この様な人とのコミュニケーションをとる事も非常に大事だと思いますので、この様な経験を将来に活かしてくれたらうれしく思います。

受け入れ期間中は特別な対応をする事無く、普段通りの家族の生活に溶け込んでいた事、言葉も何の不自由なく交わされた事、食事も普段通りに作るだけで、特別なメニューの必要が無かった事など、当初想定していたよりは非常に楽でした。特に食べ物に関しては好き嫌いが少なく、食べた事の無い物でも、積極的に食べようと挑戦もしてくれました。美味しい物はきちんと“おいしい”、口に合わない物は“食べられない”と言っておりましたので、こちらも全く気を使う事無く、普段通りの食事の準備が出来ました。

口に合わない物も、何が合わないのか聴いた上で、次回は改善する事で食べてくれる様になり、こちらも良い勉強になりました。お互いが気を使い遠慮する事でギクシャクするよりは、遠慮なく言いたい事を言って悪い所は注意するなど、自分の子供と同じ扱いをした事も、平穏な生活が出来た一番の要因ではないかと思います。

程さんが帰国した後も、テレビ電話やメールなどで交流を続けて居ますので、我が子にとっても国際交流と言う観点では、非常に有難い機会を頂いたと感謝しております。

以上

《友達からのメッセージ》

中国にいる大切な親友へ

沖縄県立向陽高等学校　杉本　美泉

私にとって張馳は、今までの人生で出会ったなかで一番気が合い、なんでも打ち明けることができる大切な親友です。彼女は沖縄に来たばかりのころから日本語がとても上手で、私達はすごく驚いてしまいました。何にでも興味をしめし、優しくて明るいちーは、すぐに学校にとけこみ人気者になりました。他学科の男子生徒の間でかわいいと噂になったのもうなずけます^^

ちーは沖縄で日本以外の沖縄独自の文化にも多く触れ、体験することができてとても良かったと思います。彼女と参加したイベントや行事は数え上げるときりがないほどです。彼女の中国の生活や学校の話もたくさん聞き、いつも日本との違いに驚きの連続でした。今思えば、ちーと過ごした1年はあっという間でしたが、本当にたくさんの思い出が詰まった楽しい一年でした。わたしたちは今、お互い受験生であまり連絡をとることができませんが、どんなに離れていたって彼女とはいつもつながっているような気がします。彼女との出会いによって、友情に国籍や文化の違いなどは関係ないということを実感しました。また会える日を楽しみにしています。その時はたくさんお喋りしようね～。ちーの恋バナもよろしく(^^)

《友達からのメッセージ》

馨ちゃんと愉快な7人

光ヶ丘女子高等学校　金原　安梨

馨ちゃんが私達のクラスに来た日。留学生が来ると聞いて、楽しみに待っていたのでよく覚えています。絶対に仲良くなろう、と決めて話しかけました。それから、とても仲良くなることができて、お弁当もゆかいな八人で一緒に食べていました。ホームステイ先の話を聞いたり、中国語を教えてもらいながら、笑顔の馨ちゃんがいるのが当たり前になりました。

それから、去年の十二月一日のことです。馨ちゃんの誕生日だと聞いて、七人でプレゼントを準備しました。プレゼントは、膝かけと桜がついたお弁当箱。日本にいる時に使ったらもったいないと使ってくれなかったお弁当箱だけど、帰ってから使ってくれたかな？馨ちゃんのことだから、忘れてたりして。使ってくれてるといいな。

そして、馨ちゃんとお別れ。十ヶ月間は本当にあっという間でした。部活などで全員が顔を揃えることはなかったけど、桜祭りに、串屋でご飯、楽しかったな。最後の最後まで笑顔いっぱいの馨ちゃんを私達も笑顔で見送りました。

十ヶ月間お疲れ様。私達のクラスに来てくれてありがとう。また遊びに来てね。

寿美、夏那、絵美子、智帆、安梨、衣里、夏美。

みんなのこと忘れないでね。みんなから、大好き!!!

◆ 取材・写真・文責：七咲 友梨

留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol. 1

「毎日、あっという間に夕方になります」

ZOU SENDI 鄒森笛

鄒君が通う共生高校の全校生徒は約300人、そのなかで約1割が外国人留学生で、中国、台湾、韓国、カンボジアとアジア色豊かだ。日本人の生徒も県外組が多く、九州や遠く関東からの生徒もいる。

ここでは様々な土地や国で育った人が、お互いの違いを認め合いながら一緒に過ごしている。

新見市のような小さな街で、多様な価値観を持った人たちと出会えることはとても貴重なことだろう。

新見の町を歩けばお年寄りがよく声をかけてくる。目が合えばにっこり笑う。

この土地を訪れた3日間、私は先日滞在したNYのクイーンズを思い出した。移民が多く住み、みんながフレンドリーなところが少し似ている。

だが、エネルギーがあり余っている高校生にとって新見は決して刺激的な町ではない。コンビニの数も少なく、買い物する場所は限られている。

空は広く青く、鄒君が「せっかく買ったのに凧揚げができない」と嘆くくらい風はあまりつよく吹かない。ここはそんな穏やかな町なのだ。

鄒君お気に入りの城山公園の高台から新見の街を見下ろした時のことだ。

「あ、電車の音」と耳を澄ませる。

2両編成の電車が遠くの方からだんだん音を大きく響かせながら近づいてくる。

「中国人の僕にとってはこういうことも珍しいです」

自分の考えを確認するように、彼はいつもゆっくりと話す。

それにしても、彼の日々は多忙だ。

時間すら穏やかに過ぎていくように感じられる新見だが、日々は確実に過ぎて行く。

鄒君はそのことをよく分かっているのだろう。興味があればなんでも挑戦していることが伝わってくる。

放課後は、地域との結びつきが強く様々なボランティア活動をするインターアクト部と、バスケ部を掛け持ちし、授業では茶道や裁縫にも挑戦している。

学校の友達も鄒君にとっておもしろそうなことがあれば、どんどん誘ってくる。

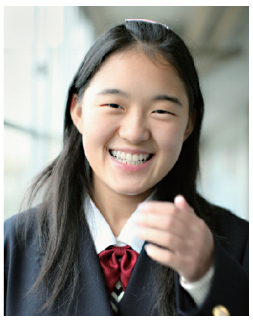
仲良しの友達は鄒君との別れの日のことを思うと、もう今から淋しくなってしまうのだという

鄒君にとってこの小さな街、新見で過ごす何気ない日々が特別だと感じられるのは、勉強ばかりしていたという中国での生活と違い、ささいな気持ちすら伝え合える人との関わりがあるからなのではないだろうか。

留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol. 2



「心ちゃんって、呼んでください」

FENG XINHE 馮心鶴

心ちゃんは日本への留学を両親に相談した時、最初は反対されたという。東日本大震災のすぐあとだったからなおさらだ。心配するのも無理はない。

それでも心ちゃんはどうしても日本へ留学したかった。

アニメ「名探偵コナン」が好きだということや、中国の元首相、周恩来がかつて日本に留学していたことが彼女を日本に向かわせる。

「周恩来さんはとてもかっこいい！知識もあるし」

女子高生が元首相をまるでアイドルのように慕っていることが原動力になるなんて、少しビックリした。今でも中国ではとても人気があるのだそうだ。

イギリスに留学させたがった親を説得し、８月、ついに彼女は日本にやって来た。

心ちゃんの留学先、島根県松江市は日本海沿いに位置する城下町だ。

観光地であるのに派手さはなく、奥ゆかしい。

江戸時代の自然や景観がのこる情緒的な街並みを歩くと、大きな時間の流れの中にいることを感じずにはいられない。

また松江の冬の天気は劇的だ。

ものの５分で快晴、曇り、雨、あられとどんどん変わり、その日は虹まででた。

風が強いので寒がりの心ちゃんは大変かもしれない。

「日本の学校は黒いタイツをはいてもいいと聞いていたから、中国でたくさん買ってきました」

でも実際は、制服には白いソックスと学校の規定で決まっていた。黒タイツの出番はない。膝が寒そうだ。

中国でお母さんに買ってもらったという青色のロングジャケットと白いマフラーが、心ちゃんをしっかりと寒さから守っている。

自宅から学校までは決して近くはない。自転車、電車、バスを乗り継ぎ通っている。

通学途中、ただっ広い田んぼのあぜ道を自転車で通る。心ちゃんはここでいつも思い切り歌を歌う。

英語が得意な彼女は中国語、日本語、英語の歌、なんでも歌う。例えば日本語の歌なら「名探偵コナン」のエンディング「Your Best Friend」がお気に入りだ。

明るくて人懐っこい彼女はホストファミリーのお母さんとも仲が良い。

ボランティア活動もされているお母さんはとてもオープンな方で、心ちゃんに話しかける口調はまるで本当の家族のよう。よそよそしさは全くない。心ちゃんも安心していることが伝わってくる。

将来は高校の先生になりたいと話してくれた心ちゃんの、日本での留学生活はもうすぐ半分を終えようとしている。

本当におもしろいことはきっと、ここから始まる。

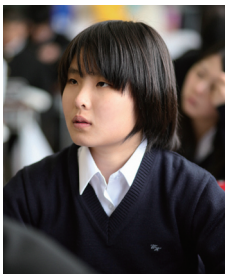
留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol.3

「日本に来て、深くものを考えるようになりました」

WANG JUE 王 珏



「玉ちゃん」こと、王珏ちゃんは今、埼玉県さいたま市にホームステイしている。

会うなり、休みの日に、ひとり東京散策した話を始めた。

明治神宮・代々木公園・都庁を１日中歩き回り、

「すっごく歩いて足がいたくなりました」と笑った。

秋葉原や、ディズニーランドに行ったこともある。今度は横浜の中華街に、そのうち京都にも行ってみたいと言う。

積極的に出かける玉ちゃん。

小さい頃、ツアーコンダクターをやっていたお母さんについて、いろんな場所を訪れたことが彼女の心に根付いているのかもしれない。

放課後は、部活動に励んでいる。

以前バドミントンをやっていたこともありテニス部に入部したのだが、初めてのテニスはなかなか難しい。

練習におじゃました時のこと、

「みんな上手だけど、わたしはまだそんなに上手にできないから…」

と恥ずかしがっていた玉ちゃんは、いざ撮影になると上手に打っているところを撮って欲しい、と負けず嫌いだ。

彼女は毎週木曜日、さいたま市にあるボランティアの日本語教室に通っている。

色んな国から来た、幅広い年齢層の方々と一緒だ。

中でもボランティアの北村さんにはとてもお世話になっている。

「北村さん、本当に大好き！」

日本に来たばかりの頃、困っていることを相談した時、一緒になって泣いてくれたのだと、玉ちゃんは今でも感動しながら話してくれた。

積極的で人懐っこい彼女だが、中国にいた時はあまり人と話をしなかったという。

勉強や試験の順位のことで頭がいっぱい、他のことはなにも考えられなかったからだ。

「日本に来てから、深くものを考えるようになりました」

どう生きていくのか、自分は将来はどうあるべきなのか。

勉強ももちろん大切。でも、何といってもコミュニケーションの大切さを痛感している。

「明るくなりたい」という彼女だが、今でもじゅうぶん明るい！きっとこれが彼女の本来の姿なのだろう。

自分に向き合い、積極的に活動する日々。とはいえ、やはり中国に戻ったときのこと、特に勉強のことが気になってしまう。

放課後の部活を終え家に帰り、ご飯、お風呂、洗濯を終えると夜の10時半でもうクタクタだ。

この状況でいかに毎日勉強に向かうことができるか。彼女は今、そのバランスを模索している。

１年間という長い「旅」。中国で彼女を待つお母さんが半年後彼女と再会したとき、いったいどんなことを感じるのだろうか。

留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol. 4

「中国の友達にさくらの花をおくります」

ZHANG XINYU 張馨予

初めて彼女に会った瞬間、「おや？」と不思議な感覚を覚えた。

けいちゃんこと、張馨予さん。高校2年生、17才。

この落ち着きぶりはなんだろう。

初めて会う人にも自分らしくいられることはけっして簡単ではない。それを彼女はなんとも自然にやってのける。

「無理はしません。無理すると悲しいでしょう？」

撮影当日、さくら祭りが開かれている河川敷にけいちゃんの友達が集まってくれた。みんながそれぞれの個性を認め合う、いい仲間だ。

それにしても女子高生のガールズトークはスピードが速い。

日本に来たばかりの頃、日本語がほとんど理解できなかったというけいちゃんも同じスピードで話す。

そうとう勉強したのだろうし、なにより彼女のこのコミュニケーション力があってこそではないだろうか。

彼女はこの半年間に、寮とホストファミリー5軒をほぼ1ヶ月ごとに移り住んだ。

新しい生活環境に慣れることは、さぞ大変だったろうと聞いてみたら、「楽ではないけれど、すごく楽しかったよ」と笑う。

彼女は様々な家庭に触れて初めて知ったことがたくさんあり、中国の家庭ではめずらしいという、専業主婦についての考え方もかわった。

「いつ帰っても家があったかいなんて。“いってらっしゃい”って、ちゃんと言えるなんて。それはすごいあったかいこと。そういう幸せもあるなんて知らなかった」

和食がおいしい家庭や、家族みんなが自負するほどの変わり者家族、まるで妹のような人との出会いもあった。

外側からだけでは分かり得ないそれぞれの家庭のあり方を、彼女はこの半年間でたくさん経験した。

彼女は自分の家族がちょっと複雑だったこともあり、きっと人一倍家庭というものについて考えてきたのだろうと思う。

嵐の日の喫茶店で彼女は言った。

「世界は広い！」

身の回りで、たとえば友達といざこざがあったとしても、世界の広さを知っていれば、自分の心を煩わせていることがとても小さなことだと分かる。

元々は極度の心配性だという彼女は日本に来てそんな風に考えられるようになった。

中国の何人かの友達からこれまでに9通、手紙が届いたという。

「手紙の中にさくらの花を挟もう！」

形の整っているさくらの花を見つけてはていねいに拾い、彼女は寮へと戻って行った。

留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol.5

「初めまして！Qでーす！」

QIAO QIANQIAN 喬倩倩

クラスメイトの男の子が、わたしの名前Qiao Qianqianだから“3Q（サンキュー）だね”って言ったのー！」

と大爆笑する彼女、Qちゃんとは、その日会ってまだ15分足らずの時。

なんて大きな声！笑っちゃうくらいにハイテンション！

気取らず、あっけらかんと真正面からぶつかってくる彼女との距離を縮めるのに時間はかからなかった。

今お世話になっているホストファミリーの家に来てからまだ1ヶ月だというのにも驚いた。彼女が完全に馴染んでいたからだ。

「お母さんお腹空いたーっ」と甘えてみたり、お父さんから日本での礼儀作法について注意されるのを真面目に聞いていたり、大切にされているのが伝わってくる。

何にでも興味津々でじっとしていられず、雨の日に電車に傘を忘れたりするおっちょこちょいな彼女。ホストファミリーのお父さんが「小学3年生みたいだ」とからかう。

今度はQちゃんがご夫婦の仲の良さを「お父さんたち、ラブラブ～で、らくらく～だよね～」と言って笑う。

彼女に「理想の生活ってどんなもの？」と聞いてみた。

「それはね、やっぱり、わたしのことを好きな人がいて、その人のことをわたしも好きで、その人と一緒にいられること。あとは小説を書いたりしたい」

自分の中にわき起こったことや、美しいと感じたものを書くのが好きだと言う。どんどん書けて約7万文字の小説を書いたけど、まだ完成はしていない。

「内容はもちろん恋愛小説だよ～。女の子だもん！」

Qちゃんは恋に恋する女子高生なのだ。

自分の思っていることを正直に口にし、人との壁をあっさりと乗り越えてしまう彼女だが、昨年の9月に日本に来てから半年間はまったく馴染めなかったという。

「友達が全然できなくてほんとに淋しかったよぉー」

このままで中国に帰ることになってはいけないと思ったのだろう、彼女はある決心をし、行動に移した。

まず寮ではなく、ホームステイさせてくれるところを探すこと。

これまで留学していた先輩に連絡を取り、外国人の相談を受け付けているセンター、出羽庄内国際村を知った。

交通手段は、本数が少なく料金も高いバス。彼女は1時間かけて歩いた。

そこであるホストファミリーと出会い、週末だけ2ヶ月間、ホームステイさせてもらえた。

そしてもう1つの決意。

新学期が始まり、新しいクラスになった。

「ぜったい、わたしから話しかけるって決めてたよ。わたしから、らくらく～の雰囲気にするんだ」

部活動にきていたクラスメイトが遠くからQちゃんに声をかけてきた。

彼女は何度も「友達も一緒に撮影できたらよかったのに」と残念がった。

お祭りの日、御神輿を担がせてもらえることになった。

「初めまして！」地域の方々に混ざって行く彼女。

意外にも何度も躊躇しては、中に入って行く。

彼女にとって、知らない人と仲良くすることは決して容易ではないのかもしれない。

梅も桃も桜も一気に花が咲く東北地方で過ごすこの春、彼女の中で何かがぱちん！と、花開いたのではないかと思う。

留日情景 7.

photo yuri nanasaki

Vol.6

「今を楽しみたい」

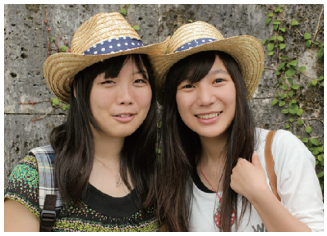
ZHANG CHI 張馳

待ち合わせの首里城に、ちぃちゃんこと張馳さんと、彼女のクラスメイトの美泉(みが)ちゃんがやってきた。

会ってすぐ、「風が吹くから帽子を買いたい」と2人が言う。

「太陽もそんなに強くないし、第一、風が吹くから？」と思ったが、風で髪がバサバサになるのがイヤなのだと言う。帽子で抑えようというわけだ。おしゃれには余念がない高校2年生、ちょっとした髪の乱れも気になるのだ。

でもそのあと、風で帽子が飛んでしまい大騒動だったのは言うまでもない。



記念写真を何枚も何枚も撮ったり、アイスクリームを食べたり、腕を組んで歩いたりと、はしゃぐ2人に仲の良さが伝わってくる。

「美泉はほんっとに、優しい」

照れ屋なちぃちゃんを美泉ちゃんがサポートし、いろんな沖縄を体験させようとする。うん、いい友達だ。

日本に来て9ヶ月、沖縄のなにが一番好きかと聞いたら、すかさず、

「沖縄はおいしいですよ〜！」と親指を立てる。特にタコライスがお気に入りだそうだ。

でも、ほとんどが寮で出るご飯のこと。とても満足しているようだ。

その他、数多くある沖縄のお菓子の中でもどれがお気に入りなのかを事細かに説明してくれ、その日2個目のソフトクリームを食べることになった。

「絶対、ほんとにおいしいから、食べてほしい！」

その熱意に、負けた。

台風が沖縄に接近している月曜日、学校のピロティには伝統芸能「美ら舞エイサー」の練習が行われていた。

女子が合わせて踊る沖縄民謡と、男子の練習する太鼓の音が、風に乗って空に舞い上がって行く。

2年生に踊りを教える3年生の手つきがとてもきれいでみとれてしまう。でも、これは簡単には覚えられそうもない。

みんなお昼ご飯を数分でさっと食べ、一息つく間もなくここに集まり、毎日少しの時間も惜しんで練習するのだそうだ。

ちぃちゃんもその中に混ざって練習していた。その目はまさに真剣そのもの。

「伝統の踊りだから間違えるわけにいかないし、ほんとに難しいんですよぉ」とタオルを握りしめる。

昨日はあんなに髪型のことを気にしていたのに、撮影のこともすっかり忘れ練習に没頭する彼女を見て、「今を大切にして楽しむの」と言っていたのを思い出した。

「ホームシックにはなるけれど、淋しくて帰りたいとは思わないし、中国に帰ったら日本に戻りたいって泣くことはないと思う」

ずいぶん潔い。

そんな彼女が気にするのは、少し身体の悪いお母さんのこと。いつも今日はどんなことをしたのか報告しているそうだ。

彼女がたくさん写真を撮るのも写真が好きだからではなく、なかなか出掛けられないお母さんに見せるためなのだ。

照れ屋なのに積極的な彼女。それは彼女の優しさそのものなのかもしれない。

留学生に聞きました！

Q and A

第六期生の皆の帰国後、この一年を振り返ってもらい、様々な質問に答えてもらいました。（回答は原文まま。）

Q. 日本での生活を通じて、どんなところが成長したと思いますか？

1位 自立できるようになった

「今までやったことがないことを自分でできるようになった」という声が一番多くありました。「自分で問題解決する力がついた」、「金銭管理ができるようになった」という声も。

2位 心の成長

思いやりの心を重んじる日本人の付き合い方を通して、「相手の立場に立って考えられるようになった」、「人の意見や話を聞けるようになった」との声がありました。また、お世話になった人へ「感謝の気持ちをもてるようになった」、またホームステイや親と離れて生活することを通じて「家族の大切さがわかった」という声もありました。

3位 交流する力がついた

勇気をもって話しかける、人と仲良くする等、コミュニケーションに必要な能力が養われました。

その他

「物事を最後まで貫く精神」、「自信がもてるようになった」、「積極的になった」、「礼儀正しくなった」という声もあがりました。

留学生の声

Voice of Students

クラブに入ることを通して、体を鍛えるとともに、物事に対する気持ちも変わりました。最後まで粘ることや、自分を信じれるようになってきました。別れたときいろいろ辛かったが、今思い返すと、辛い思いも全部今を支える力になっています。

Voice of Students

人の話を聞くことの大切さがわかりました。前の自分は自惚れが強いので、人の話を聞かないばかりに、ひどい目にあったんです。この一年で、円滑にアドバイスや意見を受け止めるようになりました。

Voice of Students

（日本で生活して）視野が広がり、勉強することはテストのためだけでなく、健全な人格を作り上げるための勉強だという考え方に変わりました。だから今は学校の教科書に載せていることに限らず、いろんなところからさまざまな分野のことに関心を持つようになりました。

Voice of Students

人と付き合うとき、人の立場に立ち、ほかの人の気持ちを考え、もっと思いやりのある人になったと思います。

Q. 留学中、あなたが一番辛かったことは何ですか？

1位 人と仲良くなること

来日当初は知らない人だらけ。ゼロから人間関係を構築していくには、時間はかかるし、きっかけも必要です。ホストファミリーはあくまでも他人ですから、本当の家族のようになるには双方の努力が必要です。また、学校では学期の途中から入ったので、クラスに馴染むのが大変だったという声もありました。どうやったら周りの人と仲良くなれるのか、悩んだ人は多いと思います。

2位 ホームシック・寂しさ

初めて一人で外国に来た高校生たちですから、やはりホームシックになるのもやむを得ませんね。中間研修の後、久しぶりに再会した六期生の仲間と別れ、無性に寂しくなったという生徒もいました。

3位 誤 解

日本と中国には考え方ややり方の違いがあります。誤解を受けたり、迷惑をかけてしまったり、予期せぬところで叱られた、という経験も多々あったようです。特に来日当初は日本語で自分の考えを満足に伝えられなくてもどかしい思いをしたということはよくあるようですね。

その他

「部活動についていけなかったこと」、「病気・怪我」など、留学生活には楽しいことだけではなく辛いこともありましたが、みんながそれを乗り越えてきました。

留学生の声

Voice of Students 友達を作ることは大変でした。最初は日本語も下手だし、人に声をかけるのは恥ずかしかったし、なかなか友達ができなかったです．毎日さびしい、さびしいと思いました。ホームシックもあったためちょっと辛かったです。

Voice of Students 最初は友達の言ったことがよくわからなくて、一緒に笑ったり、何かについて話し合ったりすることが出来なくて、ちょっと焦っていました。

Voice of Students ホストファミリーは小さい兄弟がいますので、自分もひとり子だし、最初はなかなかうまく行けなかったんですが、先生と相談して、お母さんにもいろいろ手伝ってもらったので、今思えば、本当に兄弟ができて、良かったです。これは私の大切な宝物ですから。

Voice of Students 最後の二ヶ月、日本での生活も残りわずか、日本の友達と別れる辛さ、帰りたくないという気持ちと同時に、中国の家族にも早く会いたいという複雑な心境が辛かったです。

Voice of Students やっぱりバレーボール部の溶け込めなかったことです。私は最初に、バレーボールには全然わからなくて、体育と勉強との両立も不安があって、複雑な気持ちでした。コートのなかに入れないし、技術も全然ついて行けないし、落ち込んでいました。本気にやめようと思った時は何回もあったけど、最後までバレーボールを続けて。よかったと思います

Voice of Students 寮の生徒と一緒に生活すること。私は知らずに、寮の規則をたくさん違反してしまいました。ほかの人は規則を教えなかったが、私が規則が知っていると思っていて、誤解しました。それから、関係が悪くなりました。

Voice of Students 誤解されることがあった。最初は日本語上手くなかったから、説明もできなかった。

Q. 留学中、あなたが本気で頑張ったと思うことは何ですか？

1位 部活動の参加

文化系、体育系問わず、様々な部活に参加し、体を鍛え、趣味を極め、そして何より友情を深めました。

2位 周りの人との交流

「一番辛かったこと」の中でも「人と仲良くなること」が1位だったように、ホストファミリー、学校の友達との日常の交流や様々な活動に参加するなど、みんな周りの人との交流に一生懸命だったようです。

2位 勉 強

日本語の基礎は中国で勉強してきたものの、日本語だけで高校の授業についていくのは大変だったでしょう。「国語」はもちろんのこと、カタカナ地獄の「世界史」、現代文とかけ離れた「古文」は彼らを悩ませる科目だったようです。それでも頑張って、定期テストも日本の学生と同じように参加しました。

3位 学校行事

日本の学校は様々な行事があります。マラソン大会や体育祭、文化祭などなど。また、学外のスピーチコンテストや弁論大会に参加した生徒もいました！

留学生の声

Voice of Students 3月に私はソフトテニス部に入り、初心者としては大変でしたが、先輩たちにも教えてもらって、だんだん良くなりました、最初の一ヶ月は毎日筋肉痛でしたが、一生懸命練習しました。本気で頑張ったからだと思います。

Voice of Students 卓球部に入ったときはまだまだ下手だったが、みんなの足を引っ張らないように毎日の３０００メートルのランニングも一緒に走りましたし、トレーニングも練習も頑張りました。また試合もいっぱい出させてもらい、だいぶ上手になりました。日本の上下関係に慣れて、クラブの中でもクラスメートの中でも馴染めるように頑張りました。

Voice of Students 友達との付き合いを頑張りました。新しいクラスで新しい友達と遊びに行ったりして、女子話したりしました。（実はあんまり興味ないんですけど）

Voice of Students みんなと仲良くなるために関西弁を頑張って勉強しました。

Voice of Students 英語の暗唱コンテストである。わたしは人前で話すことがいやで、勇気がなかった。でもそのコンテストのときは、「わたしは中国の代表だ」と思って、思い切りがんばった。

Voice of Students 学校のマラソンで頑張りました。私あまり運動神経がないタイプですが。唯一まあまあできるスポーツは走ることです。日本に行ったら、皆すごくできるから、びっくりしました。前マラソンを走ったことがないけど、すごく心配しました。マラソン大会の時、頑張って五キロ走ってきました。

Q. 好きな日本のアーティストは誰ですか？

「好きなアーティスト」という聞き方をしたところ、様々なジャンルの芸術家・芸能人の名前があがりました。その中でも、**「嵐」**が女子生徒にダントツの人気でした！

- **歌　　手**　加山雄三、絢香、倉木麻衣、YUI、いきものがかり、西野カナ、EXILE、ゆず、徳永英明
- **俳　　優**　戸田恵梨香、小栗旬、宮崎あおい、蒼井優、城田優、綾瀬はるか、相葉裕樹
- **声　　優**　釘宮理恵、花澤香菜、置鮎龍太郎
- **小 説 家**　村上春樹、夏目漱石、東山魁夷
- **アイドル**　嵐
- **そ の 他**　安藤忠雄（建築家）、天野喜孝（イラストレーター）、宮崎駿（映画監督）、奈良美智（画家）、星野道夫（写真家）、小澤征爾（指揮者）、久石譲（作曲家）

Q. 好きな日本の映画は何ですか？

宮崎 駿 監督の映画が大人気！（ハウルの動く城、千と千尋の神隠し、風の谷のナウシカ等）　その他にも、こんな映画の名前があがりました。

「ドラえもん」、「名探偵コナン」、「ワンピース」、「君に届け」、「僕等がいた」、「FATE」
「蛍の光」、「海猿」、「SPEC」、「のだめカンタービレ」
「リリィ・シュシュのすべて」、「ラブレター」、「天使の恋」、「犬と私の10の約束」、
「はやぶさ」、「告白」、「ライアーゲーム」、「宇宙兄弟」、「日本沈没」、「岳」、「Always三丁目の夕日」

Q. 好きな日本のテレビ番組は何ですか？

バラエティは高校生が大好きな番組のようです。様々な番組の名前が挙がりました。ここでも「嵐」の出ている番組は人気が高いです！

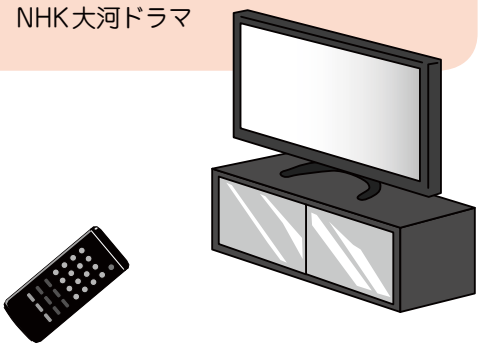
1位 バラエティ

「秘密のケンミンSHOW」、「世界一受けたい授業」、「教科書にのせたい！」、「奇跡体験！アンビリバボー」、
「逃走中」、「志村どうぶつ園」、「ほこ×たて」、「全国高等学校クイズ選手権」、
「宝探しアドベンチャー 謎解きバトルTORE！」、「嵐にしやがれ」、「VS嵐」、「見知らぬ関西新発見」
など

2位 ドラマ

「リッチマン、プアウーマン」、「BOSS」、「野ブタ。をプロデュース」、NHK大河ドラマ

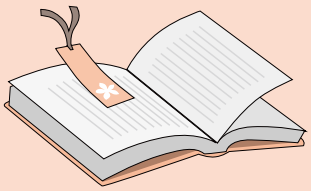
その他：「紅白歌合戦」、「温泉女子」、「おはよう日本」、
「NHK高校講座」、「さかのぼり日本史」など。



Q. 好きな日本の本は何ですか？

日本というと、漫画が好きな外国人はたくさんいますが、それだけでなく、彼らは様々な分野の本が好きなようです。特に**小説**が多く挙がりました。日本語で小説を読むことは、言葉の勉強にもなったと思います。

- **小　　説**　「告白」（湊かなえ）、「白夜行／悪意／同級生」（東野圭吾）、「三姉妹／清く貧しく美しく」（赤川次郎）、村上春樹・道尾秀介の本「学問のすすめ」（福沢諭吉）、「天国までの百マイル／鉄道員」（浅田次郎）、「金閣寺」（三島由紀夫）、「こころ」（夏目漱石）、「伊豆の踊り子」（川端康成）探偵小説（「ドグラ・マグラ」）、ＳＦ系（「銀河英雄伝説」）、歴史ミステリー、ケータイ小説（「ソード・アート・オンライン」、「恋空」）
- **実 用 書**　「人を傷つける『言い方』元気にする『言い方』」（渋谷昌三）
- **エッセイ**　「トイレの神様」（植村花菜）
- **雑　　誌**　電撃文庫マガジン
- **古　　典**　伊勢物語
- **写 真 集**　「旅をする木」（星野道夫）
- **童　　話**　小川未明童話集、「きつねの窓」（安房直子）
- **詩　　集**　「雨ニモマケズ風ニモマケズ」（宮沢賢治）

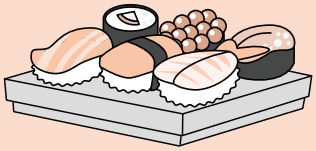


Q. 好きな食べ物＆嫌いな食べ物は何ですか？

◆ **好きな食べ物** ◆

人によって好き嫌いは異なりますが、好きな食べ物はいろいろと出てきました。そんな中、僅差で１位になったのは**「お寿司」**でした！生ものが食べられない人が依然多いにもかかわらず、やはり中国でもスシは人気のようです。

1. **寿司**　日本に来て生ものが食べられるようになったのでしょうか…
2. **お好み焼き**　広島風お好み焼きという声も！
3. **カレー・たこ焼き・てんぷら・ラーメン**
4. **オムライス・和スイーツ**　抹茶ゼリー・抹茶パフェ・和菓子など…女子に限らず？！
5. **牛丼・すき焼き・焼きそば**



その他：納豆（嫌いな食べ物では１位ですが、好きな人もいました！）、焼き餃子（中国では餃子というと水餃子。日本の焼き餃子も気に入ってくれたのですね）など。

中には「ホストファミリーが作ってくれるパスタ」、「お母さんのオムライスとカレー」・・・という声も。日本でも「おふくろの味」ができました。

◆ **嫌いな食べ物** ◆

嫌いな物を挙げた生徒は比較的少なかったですが、その中でも…ダントツの１位は、**納豆！**

約３分の１の生徒が「嫌い」と言っています。

２位以下は意見が分かれており、こんなものが挙げられていました。

明太子・わさび・生もの全般・卵かけご飯・刺身・おでん・梅干・うに・酢の物・冷やしうどん・生ねぎ　など

冷やしうどんが嫌い、という声がありましたが、中国では体を冷やす食べ物をあまり食べないからでしょうか。

六期生を受け入れて

受入校の声

受入れのご感想

中国について、身近な国でありながら、あまり良いイメージがもたれない中、中国人と直接交流する機会を持ち続けることで、親近感を持ち、興味・関心を持つきっかけになっていると感じています。

日本人高校生が失っている、教師に対する敬いの心、勤勉でひたむきな姿勢を中国人留学生は供えており、私たちも多いに触発されるところがありました。

受入生が積極的な生徒だったので、受け入れたクラスの生徒や同じクラブの生徒にとって良い刺激になった。中国という国を身近な国として実感できた。

向学心が高く、本校生の学習に対するモチベーション向上に大いに役立っている。

同年代の外国の生徒が、親元を離れてしっかり頑張っている姿をすぐ傍に見て一緒に行動すること自体が、本校生に刺激を与えていると思います。

英語圏のお客さんが多い中、留学生と交流する中で、英語圏ではない中国に興味をもつ生徒が増えた。流暢に日本語を話す留学生と接する中で、生徒が第二言語を習得するにあたって、非常に刺激を受けた。

留学生から中国の学校生活を聞くことが出来て、中国の学校事情を多少なりとも知る事が出来た。

六期生を受け入れて

受入校の声

招へい生について

勉強だけではなく、人との関わりが大切であることが理解できたようだ。来日当初はテストで良い点をとり、人より優位になろうと努めていたようだが、部活に参加し、人と付き合うことにより、このプログラムの主旨を肌で感じたと思う。

最初は学校生活や日本の家庭での習慣の違いに戸惑っていたようですが、持ち前のコミュニケーション力を発揮して、相互理解を深めたと思います。一年で別人のようになりました。

中国にはない文化祭や体育祭の行事を通して、クラスが一致団結してひとつのことに取り組む姿勢を学んでいました。

クラスの友達や部活動の仲間と行事や部活動を通じて、趣味の話しや将来の話しなど積極的に交流していました。

当初、「自分は自分」というマイペースで受身的な考え方や姿勢に心配した。貴重な体験となるはずの留学生活をより有意義にするためにはどうあるべきか、皆が気持ちよく寮生活を送るためには、お互いにどのような配慮が必要かなど本人に考えさせたり、指導したりするなかで、本人にとってはかなり教育的意義のある留学体験となったと思う。

もてなす心、他人の心を察する心、人と人の間にある微妙な上下関係など、日本で過ごさなければ理解できない文化を理解できたようです。

クラスの生徒や２・３年生を対象に中国に関するプレゼンを行い、中国の文化についての知識の普及に努めていました。また、春節に合わせて、クラスで餃子作りを行い、本場中国の作り方や味を伝えていました。校外のボランティア活動にも参加していました。

六期生を受け入れて

受入れのご感想

中国という国に対しての印象が以前より良くなりました。中国という国に対する考えが柔軟になりました。とても良い子だったので、「○○人」ではなく、「誰」であるか、だと感じました。

日本と中国との家庭での習慣の違い、大切にすること（価値観）の違いはあって当然。そのうえで、その家族の一員として暮らすためにお互いの思いを話し、相手に歩み寄ることも必要だということを、生徒も私たちも少しずつ学んだと思います。

娘が日本以外の国に興味をもつようになった。私個人としては、娘がひとり増えた喜びと、将来が楽しみになった。

これまで、中国に対してあまり関心がなかったが、今回の経験を通して、中国への関心が深まったこと、未来を担う子供たちの教育事情などに触れることができ、これからも関心をもっていけそうです。

留学生を受け入れることに不安がありましたが、彼女を受け入れたことによって他の国の方々とも交流を深めたいと思いました。

コミュニケーションの大事さが身にしみて分かりました。

ホストファミリーの声

積極的に日本の生活に馴染むための努力がすばらしく、感激しました。

彼女との暮らしの中で、私は本音をぶつけてきました。良い意味でも悪い意味でも。お互いにいっぱい笑い、いっぱい泣き、怒り、彼女のこれからの人生で役に立つことを祈っています。頑張って夢をつかんでほしいです。

生徒を通して中国の人の考え方や習慣を学ぶことが出来た。彼女が来てくれたおかげで、自分や自分の家族、日本について考える機会ができた。

国と国との関係はどうであっても、人間としての付き合いはこの様なプログラムで培うことができると思います。

私の家族について考えることができました。家族の思い。家族一人ひとりの見逃していた優しさに気付くことができました。

娘がホームステイするときに何に気をつけたらいいのか参考になったと思います。

六期生を受け入れて

招へい生について

家族で出席する地域の運動会や子供の学校の懇談会などすべての行事に一緒に出席をし、いろいろな人と話をしていました。

生活習慣が違うのでお互いに困ったと思いますが、十分に話し合いを持ちました。

普段我が家においては、夫とは政治、経済、文化などいろいろなジャンルの高尚な話で盛り上がっていた。私とは日々起こった出来事、悩み、苦しみ、楽しいこと、悲しいこと、中国の家族のことなど、自国の母親に話していたであろう話で毎日盛りあがっていた。話をするのが楽しく、時を忘れて夜更かしすることも多かった。

ホストファミリーの声

兄弟に対する思いやり、協調性が育ったように思います。

日本の文化（お茶やお花など）、食事など日本での生活、友達との関わりを通して、日本人独特の物の言い方などもかなり理解できて、対応する力もついたようです。

あとがき

8月末の対面式。隠しきれない不安に緊張した面持ちの皆さんに初めてお会いしました。翌年2月の中間研修（宮崎）では、はじけるような笑顔で再会を喜び合う皆さんの顔、姿。7月の帰国直前報告会に集まった皆さんの成長した表情、言葉の数々、そして母国中国に戻れるという安堵感。

多くの出会いと別れがいっぱいにつまった11か月でしたね。世の中にはなんと多くの未知の世界、理解に苦しむ事象があると思ったかも知れません。未知の相手でも誤解をしていても、心を開いて足を前へ踏み出し言葉を交わせば、世界は素敵で居心地はそんなに悪くない、「生きてゆけるぞ」の実感と自信をもってくれたことと確信します。そして日本や中国で君たちを見守ってくれていた方々に思いを致してくれたなら、もう十分に日中の将来、アジアの未来を托せる。そう思います。どこかの街でさらに成長した君たちと再見！

日中交流センター

前事務局長　吉川　竹二

第六期生32名は、来日したときから元気いっぱい、本当に仲のよい仲間たちでしたね。宮崎の中間研修では同期の絆が一層強まったものと思います。数人ずつ分かれて泊めていただいた農家のお宅に、夜見回りに行ったときの皆のはじけるような笑顔が忘れられません。一方、一年間の留学生活の間には、泣きたくなるようなつらいことも何度もありました。様々な体験を乗り越えて、一年間で大きく成長した皆さんの顔を帰国前に見るとき、本当にこの仕事をしていてよかったなあと感じます。一人ひとりが、その人だけのかけがえのない留学生活を送ったことを自分の原点として、これからの人生を前向きに、明るく切り拓いていってくれることを願っています。

私事ながら、第三期生から担当させていただき、スタッフとして帰国までを見送ったのは第六期生が最後となりました。お世話になりました先生方、ホストファミリーの皆様、その他多くのご関係の皆様、本当にありがとうございました。

日中交流センター

前事務局次長　塩澤　雅代

例年より個性が強いからか、同期の結束が固いからか、自分でもつかめていないが、第六期生32名は私にとって印象深い。15、6の高校生が1人異国の地で暮らす苦悩こそ計り知れないが、彼らは自らの“居場所”をしっかりと築き上げてくれた。滞在地を離れる様子を追いかけた映像には、その“居場所”がありありと、我々の想像を超える“濃密さ”で映し出されている。日本で紆余曲折を経験した彼らが蒔いた交流の種がいつか大輪の花を咲かせ、両国を繋いでくれるのだと思うと、昨今の日中関係に垂れ込める暗雲もいずれ晴れ渡ると、私は信じて止まない。

日中交流センター

主任　後井　隆伸

第四期生から高校生事業の担当をして3年。毎年どんな生徒が来るのか楽しみにしています。今回の第六期生は積極的で感受性の強い生徒たちでした。中間研修では、初めて会う農家の方々にも物怖じせず積極的に交流をし、別れのときには農家の方々と抱き合って別れを惜しんでいる姿を目にしました。

日本の人たちの性格がそれぞれ違うように、中国の生徒たちもそれぞれの個性を持っています。毎年受け入れてくださる先生方、我が子のように接してくださるホストファミリーの皆さん、自分のことのように一喜一憂してくれる友達。人と人との想いが繋がるところに国籍は関係ありません。今後も国を超えた交流が続いてくれることを願っています。

日中交流センター
スタッフ　諸田　知恵美

私にとって六期生の皆さんは心連心で初めて関わる生徒たちでした。数としてはたったの32名、しかし彼らと触れ合い支えてくださった方はその何十倍といてくださると思うと、本当に心強くありがたいことです。短期間の表面だけの交流であれば、「楽しかった」だけで終わるかもしれません。しかし、11ヶ月という長い期間は深みが違います。異なる文化背景の人たちが交わり、互いを理解しようとする中には、様々な困難もあると思いますが、皆さんが互いに真剣に向き合おうとする心、乗り越えようと努力する姿に触れるとき、深く感動するのです。そんな一つ一つがこのプログラムに関わるやりがいです。そして、元気に成長して帰っていく生徒たちの笑顔もまたやりがいを感じさせてくれます。

日中交流センター
スタッフ　豊川　佳奈

六期生の来日中、私は初めて留学先での高校生の様子を見に行きました。留学先の環境はそれぞれ違うのですが、皆さんが日本の文化や言葉にとても興味を持っていることがすごく感じられました。15、16歳という若さで、慣れないことや悩みがあるはずなのに、前向きで、困難を乗り越えていくという意気込みが感じられ、とても感心しました。帰国前研修で皆さんと再会したときは、心も体も一回りも二回りも大きくなった気がしました。

日中交流センター
スタッフ　林　虹

発行：独立行政法人 国際交流基金
日中交流センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1
TEL：03-5369-6074
FAX：03-5369-6043

Heart to Heart

JAPANFOUNDATION
国際交流基金
日中交流センター